

## カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言の文法スケッチ

鈴木 博之

四郎翁姆

オスロ大学

オスロ大学

キーワード：カムチベット語、Minyag Rabgang 方言群、名詞句、動詞句

### 1 はじめに

中国四川省甘孜藏族自治州康定市西部を中心に話されるカムチベット語 Minyag Rabgang (木雅熱崗) 方言群<sup>1</sup>に属する各種方言は、周辺の方言群<sup>2</sup>と比べると分かるように、音対応や語彙形式の面で一定の差異が認められる (Suzuki 2014a, Suzuki & Sonam Wangmo 2014)。一方、文法的特徴に関しては、先行研究による記述が少なく、方言群の間の具体的な差異がどれほどなのかを知ることは困難である。同様に、Minyag Rabgang 方言群内の方言間の差異についても、音声特徴 (鈴木 2009, Lha-mo-skyid 2010) 以外については知られていない。



図1 (左) & 図2 (右) 塔公村の位置 (=印の位置)<sup>3</sup>

本稿では、康定市塔公鎮塔公村で話されるカムチベット語 Lhagang 方言の簡便な文法スケッチを提示する。ただし、塔公村に居住するチベット語母語話者の普段の言語使用状況は単純ではない。Suzuki & Sonam Wangmo (2014) の記述によると、塔公村には少なくとも4種類のチベット系言語が話されており、そのうち2種がカムチベット語、残りの2種がアムドチベット語

<sup>1</sup> 格桑居冕 (1985) が「中路次方言」と呼ぶ諸方言とほぼ同一のものを指すと考えられる。ただし、Zhang (1996) を見ると、中国の先行研究において格桑居冕 (1985) 以外は特に当該地域のカムチベット語について独立の方言区画を設けていない。瞿靄堂・金效静 (1981)、張濟川 (1993) などを参照。

<sup>2</sup> Suzuki (2009, 2014b) などを参照。

<sup>3</sup> Suzuki & Sonam Wangmo (2015d) に用いられている地図と同じである。これらは Googlemaps (<https://www.google.co.jp/maps/>) によって作成した (2015年6月25日にアクセス)。

となっている<sup>4</sup>。2種のカムチベット語は地域変種としては単一で、社会言語学的な差異とみなすことができ、いずれも Lhagang 方言と呼べるが、区別するために Suzuki & Sonam Wangmo (2014) では Lhagang-A、Lhagang-B と分けている。Lhagang-B とは現地に最初期から定住している人々が話す土地のカムチベット語を反映するものである。一方、Lhagang-A は Lhagang-B を基礎に、特にアムドチベット語の影響を受けて発達途上にある、Lhagang-B の社会言語学的変異といえる<sup>5</sup>。本稿で記述するのは Lhagang-B のほうである。以降、本稿で Lhagang 方言と述べている場合は原則 Lhagang-B を指すものとする。なお、Suzuki & Sonam Wangmo (2015d) が Lhagang-A と Lhagang-B の語彙形式を対照する形で資料を提供している。

Lhagang 方言の母語話者の言語使用はほぼ Lhagang 方言を用いて行われているが、村内に複数の言語が分布しかつ用いられている点で、日常的な言語接触を生み出し、場合によっては接触言語（アムドチベット語）も話すなど、必ずしも「単一言語使用」とはみなされない。実際、語りの文脈では Lhagang-B による発話に Lhagang-A の形式が挿入されることがある（鈴木ほか 2015ab, Suzuki & Sonam Wangmo 2017）。また、日常生活の中で漢語（西南官話四川方言）の広範な使用も認められる。このため、Lhagang 方言の置かれている言語環境は、Minyag Rabgang 方言群に属する方言群の中で、アムドチベット語との接触という特別な環境にあるといえる。塔公村の人口は約 1500 人を数えるが、半数は本来塔公村周辺で牧畜民として生活していたが政策によって定住した経緯を持つ移住者であり（Sonam Wangmo 2013）、本稿でいう Lhagang 方言（Lhagang-B）の話者数もまた約半数と見積もられる。また、Lhagang-B は上述の言語環境の中で急激な変化を被っており、塔公村の定住民が代々伝えてきた言語を現在記録しない限り、容易に知ることができなくなる危惧がある（Suzuki & Sonam Wangmo 2015ab）。

本稿で用いる Lhagang 方言の言語資料は、第 1 著者の現地調査で得られたものと、Lhagang 方言（Lhagang-B）を母語とする第 2 著者が提供したものである。前者の主な調査協力者はラモチェ [Lha-mo-skyid] さん（女性）で、塔公村の出身である。語彙調査および文法調査ともに漢語を媒介言語とした翻訳形式を中心に行った。なお、本稿に収録する語彙および例文は、すべて第 2 著者によるチェックを経て、Lhagang 方言（Lhagang-B）であることを確認した。これにより本稿は Lhagang 方言に関連する記述の中で、初めて Lhagang-B に特化したものになる。

本稿の構成は、Lhagang 方言の音体系の記述と具体例の提示（2 節）、名詞句（3 節）、動詞句（4 節）、文のタイプと分類（5 節）の順で記述を行う<sup>6</sup>。内容は Lhagang 方言の記述に的を絞り、近縁方言やチベット文語形式との対比という観点からの分析は行わない。語釈つき例文には通し番号を与える。末尾に索引を兼ねたもくじを配する。なお、本スケッチは、名詞句・動詞句といった分類方法から漏れる周辺的な要素の記述が不十分であるほか、なお詳細な分析を必要とする部分が少なくない。これについては、個別にかつ段階を経て稿をなすこととする。

<sup>4</sup> Suzuki (2016), Suzuki & Sonam Wangmo (2016, 2017) はさらに複数の言語・方言の存在を報告している。塔公村の詳細な背景については Sonam Wangmo (2013, 2014, 2016, forthcoming) を参照。

<sup>5</sup> この複雑で整理の難しい状況になっているのは、塔公村の言語状況が十分に理解されないまま鈴木 (2006) による Lhagang-A の記述報告が先行してしまったことによる。

<sup>6</sup> 本稿の構成は鈴木 (2014) に近い。ただし、Tournadre & Suzuki (forthcoming) を参考に書きかえた。

## 2 Lhagang 方言の音体系

本節では Lhagang 方言 (Lhagang-B) の音体系と各音素の具体例を提示する。表記には特殊文字のようなものを含まない正書法を設けず、超分節音の記述を除いて直接音標文字を用いる。音標文字には IPA のほか朱曉農 (2010) に定義される音標文字と鈴木 (2005) で用いられている表記法も用いる。Lhagang 方言の音体系を提示している先行研究は存在する<sup>7</sup>が、Lhagang-B に限定した記述はないため、ここで改めて具体例を挙げつつ記述する。

### 2.1 音節構造

#### 2.1.1 最大の音節構造

Lhagang 方言の最大の音節構造 (分節音の配列) は、鈴木 (2005) を参照して以下のように記述できる。

$${}^c C_i GVC$$

このうち  $C_i$  (初頭主子音) と  $V$  (音節核の母音) が必須であり、 $C_i V$  を音節の最小構成とみなすことができる。 ${}^c$  (先行子音) と  $G$  (わたり音) は共起することがほとんどない。しかし絶対ないとは言えない。

Lhagang 方言に認められる末子音は /ʔ, w, j/ がある。このうち、/ʔ/ が大部分の例を占める。/ʔ/ は脱落する場合がある (2.3 参照)。

これに超分節音素として声調が加わって実現される。ただし声調は原則的に最大 2 音節の音韻語を単位としてかかるため、「音節構造」の中には記述されない。また、接辞類が付加される場合には必ずしも語単位ではなく形態素単位になる (2.2 参照)。

#### 2.1.2 具体例

以下、各種分節音の配列について、それぞれ 1 つずつ例を掲げる。

表 1 : Lhagang 方言の音節構造の具体例

${}^c$	$C_i$	$G$	$V$	$C$	具体例	語義
	$C_i$		$V$		'na	病気だ
	$C_i$	$G$	$V$		'kwa	食用種子
${}^c$	$C_i$		$V$		- <sup>h</sup> ŋa	太鼓
${}^c$	$C_i$	$G$	$V$		<sup>h</sup> gwi <sup>h</sup> gwi	キャビネット
	$C_i$		$V$	$C$	'tʰʔ	崖
${}^c$	$C_i$		$V$	$C$	' <sup>h</sup> seʔ	金

各種音節構造はその出現頻度に大きな異なりが認められ、 $G$  を含む例はあまり見かけない。

<sup>7</sup> 鈴木 (2006)、Suzuki & Sonam Wangmo (2015d) など。鈴木 (2006) の記述は Lhagang-A を扱っている。

## 2.2 超分節音素

### 2.2.1 声調とその表記

Lhagang 方言の超分節音素はピッチの高低による声調として実現される。声調パターンとして、以下の4種が認められる。

ˉ : 高平                  ˊ : 上昇                  ˋ : 下降                  ˆ : 上昇下降

声調は原則として最大2音節からなる音韻語を単位としてかかるり、3音節以上からなる語については、3音節目以降低平～中平のピッチとなって、弁別的にならないか、もしくは異なる声調領域を形成する（具体例については3.2や3.7.1を参照）。

ただし、1音節語では高（高平/下降）、低（上昇/上昇下降）の2タイプのみが対立する。接尾辞がついた時の声調の現れにより、4つのいずれかの声調記号を与えることになる。

声調のかかる単位の中には各種接尾辞類（格標識、名詞化標識、動詞接尾辞など）も含まれるが、接頭辞がある場合は接頭辞の声調パターンが語全体の声調に影響し、必ずしも中核的な語の声調が維持されるとは限らず、動詞複合形式では中心となる各形態素（動詞語幹やTAM標識）に接頭辞がつくたびに声調が新たに設定される。特定の接頭辞は独立した声調を担うこともある。

以上の声調記号は語（または音節）の初頭に付される。

### 2.2.2 具体例

以下に1～2音節語の声調の具体的な現れを示す。[ ] 内には各音節の分節音をSで代表し、その右肩に調値を5段階<sup>8</sup>で表示する。

	高平	上昇	下降	昇降
1音節語	ˉmiʔ [S <sup>55/52</sup> ] 「目」	ˊme [S <sup>24/243</sup> ] 「火」	ˋmĩ [S <sup>55/52</sup> ] 「名前」	ˆte: [S <sup>24/243</sup> ] 「ラバ」
2音節語	ˉmiʔ <sup>h</sup> pu [S <sup>55</sup> S <sup>55</sup> ] 「眉毛」	ˊmə <sup>ts</sup> he [S <sup>24</sup> S <sup>55</sup> ] 「命」	ˋmə <sup>ts</sup> ho [S <sup>55</sup> S <sup>32</sup> ] 「他の人」	ˆme toʔ [S <sup>24</sup> S <sup>53</sup> ] 「花」

以上に示した調値は、初頭子音によって若干異なりが現れるが、弁別的ではない。声調は型が弁別的に作用すると考えられる。

1音節語では2通りの型が認められ、語頭の高低だけが重要である。接尾辞がつくときの音声実現によって声調の型が与えられる。

<sup>8</sup> 正確には朱曉農(2010)の定義に従うため3域6段階表示であるが、Lhagang方言では声域の区別を行わない。また、伝統的な5段階で記述が可能であるため、5段階で記述することには問題はない。いずれにせよ、調値はLhagang方言の音体系にとっては重要ではない。

## 2.3 母音

### 2.3.1 母音の舌位置による一覧

舌位置による一覧は次のようになる。

i	u	ɯ	u
e	ə	o	
ɛ		ɔ	
a	ɑ		

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立しているため、計4種の対立が認められる。ただし、すべ挙ての舌位置について4種の対立が認められるわけではない。特に長鼻母音は出現に制限が見られ、語例もきわめて限定的である。

母音の舌位置の表記は、実際の発音に最も近い補助記号を用いない音標文字で行う。母音の性質上、音環境によって舌位置に変動が認められるが、本稿ではその記述を省略する。

「短母音+声門閉鎖音/?」の組み合わせは、語（形態素）によって語中において長母音と交替することがある。この場合は実際の発音に基づいて記述する。

### 2.3.2 具体例

以下に短母音、長母音、鼻母音の具体例を掲げる。

	短母音例		長母音例		鼻母音例
i	ˈmiʔ 目	ˈtsʰi:	ラード	ˈtʃi	雲
e	ˈme 火	ˈtʰe:	できる	ˈtʰɛ̃ fia	数珠
ɛ	ˈmɛ 葉	ˈmɛ: ʰso	休む	ˈzĩ ɕa	袈裟
a	ˈma ʰtsa 資金	ˈru ʰba:	亀	ˈmĩ lã	夢
ɑ	ˈla ŋa 腕	ˈda: po	主人	ˈgo fĩ	鷹
ɔ	ˈɕa sʰɔ 烏小屋	ˈsʰɔ: ɲĩ	明日	ˈlĩ	牛
o	ˈmo ʰta xɛ 占い師	ˈto:	熊	ˈtɕa kʰɔ	洞窟
ɯ	ˈmu tiʔ 真珠	ˈku:	テント	ˈpɯ̃ ɲɕi	兄弟姉妹
u	ˈmu ku 鳩	ˈɲu: ma	竹	ˈlĩ ɱba	湿った
ɯ	ˈtɕa tʰe la 祭り	ˈpɯ:	昇る	ˈtʰɯ̃ tsə	スカート
ə	ˈmə 人	ˈɲə: ka	ひづめ	ˈtʰɔ̃ tsʰo	家族

/ĩ/は借用語を除いて認められない。

鼻母音は語末位置にくる例において、発話によってはその鼻腔共鳴が失われ、非鼻母音として実現されることがよくある。この事例は語を単独で発音する場合には認められない。

## 2.4 子音

### 2.4.1 子音音素一覧

音節構造の主子音 (C<sub>i</sub>) 位置に現れる要素の一覧は以下のようである。

表3：Lhagang 方言の主子音 (C<sub>i</sub>) 位置に現れる音素

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
				前 後			
閉鎖音	無声有気	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>		k <sup>h</sup>	
	無声無気	p	t	t		k	ʔ
	有声	b	d	d		g	
破擦音	無声有気		ts <sup>h</sup>		tɕ <sup>h</sup>		
	無声無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʒ		
摩擦音	無声有気		s <sup>h</sup>		ɕ <sup>h</sup>		
	無声無気	ɸ	s	ɕ	ɕ	x	h
	有声		z		ʒ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɲ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音	有声	w			j		

Lhagang 方言に見られる子音連続の組み合わせ数は比較的多いが、その組み合わせのパターンは単純で、大きく前鼻音、前気音、わたり音を含むものに分けられる。前の2者とわたり音は独立して現れることができるから、最大で3子音連続を形成するが、その出現頻度は低い。

### 2.4.2 具体例

子音は、初頭子音について単子音および子音連続に分けて具体例を挙げつつ考察する<sup>9</sup>。

#### A. 単子音

単子音の具体例は、可能な限り2例ずつ挙げる。

#### 閉鎖音・破擦音

Lhagang 方言は基本的に閉鎖/破擦音に無声有気、無声無気、有声の3系列を有する。ただし、声門閉鎖音は/ʔ/の1つである。

そり舌閉鎖音系列/t<sup>h</sup>, t, d/は、場合によって微弱な摩擦を伴う破擦音として実現されることが、

<sup>9</sup> 末子音としては、/ʔ, w, j/のみが認められるため、特にここでは取り上げない。

その摩擦の弱さから破擦音とはみなさない。

有声音の系列はいずれも単子音としてはあまり見られず、語中に現れる例が多い。単子音/d, dz/は未確認である（子音連続の項を参照）。また、単子音/dz/は定着した借用語に限って現れる。

	例語	語義	例語	語義
<b>p<sup>h</sup></b>	ʼp <sup>h</sup> uʔ <sup>h</sup> ge	ふた	ʼta p <sup>h</sup> e: p <sup>h</sup> e:	蝶
<b>p</b>	ʼpa mo	霜	ʼpi: li	小牛
<b>b</b>	ˉ <sup>h</sup> kuʔ ba	糸	ʼtɕ <sup>h</sup> ə bu	大きい
<b>t<sup>h</sup></b>	ˉ <sup>h</sup> ɔʔ ka	かまど	ˉ <sup>h</sup> uʔ	出会う
<b>t</b>	ʼta <sup>h</sup> ta	今	ʼtuʔ	毒
<b>d</b>	ˉ <sup>h</sup> tsɛ de	梅檀	ʼ <sup>h</sup> do: do	1 にぎり
<b>t<sup>h</sup></b>	ʼt <sup>h</sup> a mo	細い	ˉ <sup>h</sup> iʔ	導く
<b>t</b>	ʼta	網	ʼtɕe:	ラバ
<b>d</b>	該当なし			
<b>k<sup>h</sup></b>	ʼk <sup>h</sup> a leʔ	ふた	ˉ <sup>h</sup> o	彼/彼女
<b>k</b>	ʼka fiu	護身符箱	ʼko <sup>h</sup> go	鶏
<b>g</b>	ˉ <sup>h</sup> mu ge <sup>h</sup> tō	飢饉		
<b>ʔ</b>	ˉ <sup>h</sup> a ma	母	ʼʔə ni: to	用途
<b>ts<sup>h</sup></b>	ʼts <sup>h</sup> a	塩	ˉ <sup>h</sup> i:	脂肪油
<b>ts</b>	ʼtsa: ʼpi:	芽が出る	ʼtsi ʔi	ねずみ
<b>dz</b>	ʼji: dzə	石鱈	ˉ <sup>h</sup> ɛ: dzə	箸
<b>tɕ<sup>h</sup></b>	ˉ <sup>h</sup> tɕ <sup>h</sup> a ro	氷	ˉ <sup>h</sup> oʔ	あなた
<b>tɕ</b>	ʼtɕa laʔ	道具	ʼtɕo:	着る
<b>dz</b>	該当なし			

## 摩擦音

Lhagang 方言は最大で摩擦音に無声有気、無声無気、有声の3系列を有する。ただし両唇摩擦音とそり舌摩擦音には無声有気音のみが認められる。軟口蓋摩擦音、声門摩擦音は有気音を欠く。単子音/s/は未確認である（子音連続の項を参照）。

	例語	語義	例語	語義
<b>ɸ</b>	ˉ <sup>h</sup> ɸu ts <sup>h</sup> a	唐辛子	ˉ <sup>h</sup> ɸu tɕi	飛行機
<b>s<sup>h</sup></b>	ˉ <sup>h</sup> a	地	ˉ <sup>h</sup> i <sup>h</sup> bu	背負いかご
<b>s</b>	該当なし			
<b>z</b>	ʼzã <sup>m</sup> ba	橋	ʼzi: tɕ <sup>h</sup> u	露
<b>ɕ</b>	ˉ <sup>h</sup> ɕa mo	硬い	ʼɕə: tsə	柿
<b>ɕ<sup>h</sup></b>	ˉ <sup>h</sup> ɕ <sup>h</sup> a	肉	ˉ <sup>h</sup> i: ʔe	半分

ɕ	ˈca <sup>h</sup> di	ごみ	ˈci: ts <sup>h</sup> ɔ	鳥の巣
ʒ	ˈza <sup>h</sup> nu	鉛	ˈzi	畑
x	ˈxɛj tsə	靴	ˈxo ts <sup>h</sup> ɛ	マッチ
ɣ	ˈla <sup>h</sup> ɣa	手	ˈji <sup>h</sup> ɣe	文字
h	ˈhɔ	落ちる	ˈha <sup>h</sup> ˈko	理解する
fi	ˈfiə tɕa	ミルクティー	ˈfiu <sup>h</sup> pa	ふくろう

## 共鳴音

Lhagang 方言は基本的に鼻音/流音に無声、有声の2系列を有し、半母音には有声の系列のみが認められる。ただし、/r/には無声音がない。/r/は音価が多様で、中でも [z, r, ɹ] といった発音がよく認められる。

	例語	語義	例語	語義
<b>m</b>	ˈma ma	祖母	ˈmi?	目
<b>m̥</b>	ˈm̥ɛ	薬	ˈm̥u <sup>h</sup> pa	霧
<b>n</b>	ˈna <sup>h</sup> pa	病人	ˈnə	天
<b>n̥</b>	ˈn̥a	鼻	ˈn̥u	油
<b>ɲ</b>	ˈɲa	魚	ˈɲi ma me to?	ひまわり
<b>ɲ̥</b>	ˈɲ̥i	心臓	ˈɲ̥u: ma	竹
<b>ŋ</b>	ˈŋa	私	ˈŋu	泣く
<b>ŋ̥</b>	ˈŋ̥a: ts <sup>h</sup> e	早い	ˈŋ̥o	炒める
<b>l</b>	ˈlã	道	ˈlu?	綿羊
<b>l̥</b>	ˈl̥a	神	ˈl̥e:	埋める
<b>r</b>	ˈra tɕo?	つの	ˈre:	布
<b>w</b>	ˈwa mo	キツネ	ˈna: wo	森林
<b>j</b>	ˈja <sup>h</sup> kɛ	口蓋	ˈju <sup>h</sup> pu	カラスムギ

## B. 子音連続

Lhagang 方言に見られる子音連続の組み合わせは比較的多いが、その組み合わせには大きく分けて主たる子音に先行する前鼻音と前気音、そして主たる子音に後続するわたり音に分けられる。わたり音と前2者は独立しており、最大で3子音連続となるが、借用語以外はほとんど見られない。

また、基本的に前鼻音・前気音と主たる子音の間の有声性は一致する。

以下に子音連続の組み合わせを基準に分類して具体例を掲げる。



## 前鼻音

前鼻音は有声および無声有気閉鎖・破擦音および一部の摩擦音に先行し、調音位置および有声性において一致するのが基本である。

有声音に先行するもの

- <sup>m</sup>b** : <sup>m</sup>bui 虫  
**<sup>n</sup>d** : <sup>n</sup>dã <sup>m</sup>ba 泥  
**<sup>n</sup>ɖ** : <sup>n</sup>ɖə めすヤク  
**<sup>ŋ</sup>g** : <sup>ŋ</sup>go 頭  
**<sup>n</sup>dz** : <sup>n</sup>dzɔ ゾ (ヤクと牛の交配種のおす)  
**<sup>n</sup>dʒ** : <sup>n</sup>dʒã <sup>m</sup>ba あご

無声有気音に先行するもの

- <sup>ɸ</sup>p<sup>h</sup>** : <sup>ɸ</sup>p<sup>h</sup>a rə ジャツカル  
**<sup>ɸ</sup>t<sup>h</sup>** : <sup>ɸ</sup>t<sup>h</sup>e mo 親指  
**<sup>ɸ</sup>t<sup>h</sup>** : <sup>ɸ</sup>t<sup>h</sup>i <sup>h</sup>pa 胆のう  
**<sup>ɸ</sup>k<sup>h</sup>** : <sup>ɸ</sup>k<sup>h</sup>a ŋa どら  
**<sup>ɸ</sup>ts<sup>h</sup>** : <sup>ɸ</sup>ts<sup>h</sup>e: t<sup>h</sup>u? 双子  
**<sup>ɸ</sup>tɕ<sup>h</sup>** : <sup>ɸ</sup>tɕ<sup>h</sup>u <sup>h</sup>te 仏塔  
**<sup>ɸ</sup>ɕ<sup>h</sup>** : <sup>ɸ</sup>p<sup>h</sup>a rə <sup>ɸ</sup>ɕ<sup>h</sup>i? 拭き消す

## 前気音

前気音は各種無声無気音および有声音に先行し、有声性において一致する。

無声有気音に先行するもの

- <sup>h</sup>p** : <sup>h</sup>pa wo 英雄  
**<sup>h</sup>t** : <sup>h</sup>ta 馬  
**<sup>h</sup>t** : <sup>h</sup>tə ma 乞食  
**<sup>h</sup>k** : <sup>h</sup>kɯ? ba 糸  
**<sup>h</sup>ts** : <sup>h</sup>tsa wa 根  
**<sup>h</sup>tɕ** : <sup>h</sup>tɕõ ma 木  
**<sup>h</sup>s** : <sup>h</sup>sɛ: ma 豆  
**<sup>h</sup>ʂ** : <sup>h</sup>ʂo 縫う  
**<sup>h</sup>ɕ** : <sup>h</sup>ɕɯ はぐ  
**<sup>h</sup>l** : <sup>h</sup>lɑ: はやぶさ

有声音に先行するもの

- ${}^{\text{h}}\text{b}$  :  ${}^{\text{h}}\text{ba} \text{ } {}^{\text{h}}\text{la}?$  波  
 ${}^{\text{h}}\text{d}$  :  ${}^{\text{h}}\text{do}$  石  
 ${}^{\text{h}}\text{d}$  :  ${}^{\text{h}}\text{di}$  蛇  
 ${}^{\text{h}}\text{g}$  :  ${}^{\text{h}}\text{go: pa}$  にんにく  
 ${}^{\text{h}}\text{dz}$  :  ${}^{\text{h}}\text{dzō}$  町  
 ${}^{\text{h}}\text{dz}$  :  ${}^{\text{h}}\text{dzα: zo}$  背  
 ${}^{\text{h}}\text{z}$  :  ${}^{\text{h}}\text{zi}?$  豹  
 ${}^{\text{h}}\text{z}$  :  ${}^{\text{h}}\text{zo}$  乳牛  
 ${}^{\text{h}}\text{m}$  :  ${}^{\text{h}}\text{ma ca}$  孔雀  
 ${}^{\text{h}}\text{n}$  :  ${}^{\text{h}}\text{na ma}$  息子の嫁  
 ${}^{\text{h}}\text{ŋ}$  :  ${}^{\text{h}}\text{ŋi: ma}$  しわ  
 ${}^{\text{h}}\text{ŋ}$  :  ${}^{\text{h}}\text{ŋa ma}$  尾  
 ${}^{\text{h}}\text{l}$  :  ${}^{\text{h}}\text{lō}$  牛  
 ${}^{\text{h}}\text{w}$  :  ${}^{\text{h}}\text{wã tɕ^{\text{h}}a}$  権力  
 ${}^{\text{h}}\text{j}$  :  ${}^{\text{h}}\text{je: ma}$  花椒

そのほか

特定の語にのみ見られる子音連続の組み合わせには、両唇接近音 ${}^{\text{w}}$ が語中に現れる例が認められる。これは有声前気音とは交替しない。

- ${}^{\text{w}}\text{dz}$  :  ${}^{\text{h}}\text{tɕu} \text{ } {}^{\text{w}}\text{dzε}?$  18  
 ${}^{\text{w}}\text{z}$  :  ${}^{\text{h}}\text{tɕu} \text{ } {}^{\text{w}}\text{zə}$  14

わたり音

わたり音には/w/と/j/が認められる。多くが借用語に現れる。

/w/をもつもの

- $\text{kw}$  :  ${}^{\text{h}}\text{kwa kwa}$  食用種子 (<漢語「瓜瓜」)

/j/をもつもの

- $\text{pj}$  :  ${}^{\text{h}}\text{pjē tā}$  かつぎ棒 (<漢語「扁擔」)  
 $\text{tj}$  :  ${}^{\text{h}}\text{tjē}$  電気 (<漢語「電」)

3子音連続

- ${}^{\text{h}}\text{gw}$  :  ${}^{\text{h}}\text{gwi} \text{ } {}^{\text{h}}\text{gwi}$  キャビネット

### 3 名詞句

#### 3.1 名詞句の基本構造

Lhagang 方言における名詞句は、中心となる語が名詞の場合、おおよそ以下のような構造で現れる。

**(指示詞)-(関係節)-名詞-(形容詞)-(数詞)-(指示詞)-格標識-(主題標識)**

名詞句は基本的に何らかの格標識（ゼロ形態含む）を伴うと考えることができる。しかし実際の記述の上では、一部の場所・時間などを表す名詞句がゼロ形態による格標識をとるものは絶対格ではなく位格に置かれていると考え、ゼロ形態素 (∅) および語釈をいちいち表示しない。

また、格標識には主題標識が後続しうる。主題標識は名詞句のみに付加される。

指示詞は2か所に現れうるが、同時に現れることはまれである。詳細は 3.3.2 参照。

修飾句は名詞化接辞を伴う名詞句の場合は被修飾語である名詞に前置され、形容詞もしくはそれに準じる形態の場合は被修飾語である名詞に後置される。両者の修飾句は共起可能である。

また、名詞化接辞を伴う名詞句それ自体が名詞と同等に機能するときも以上の名詞句構造をとる。

以上のうち、名詞句の中心となる名詞に先行する指示詞、関係節、形容詞は、音節数にかかわらず独自に声調を担うことができる。

名詞句の中心となる語には、名詞のほかに代名詞も現れる。代名詞の場合、名詞句はおおよそ以下のような構造で現れる。

**代名詞-(数詞)-格標識-(主題標識)**

代名詞は、形態によっては、格標示を格標識ではなく語幹の形態変化によって表すものがある。なお、代名詞は修飾語（句）を伴わない。

#### 3.2 名詞

単音節語、2音節語が多い。派生語や複合語の場合、3音節や4音節で1語になっているものもある。

##### 1. 単音節語

˦nə「空」、˦me「火」、˦go「頭」、˦luʔ「綿羊」

##### 2. 2音節語

˦i˦da wa「月（天体）」、˦tɕ˦u miʔ「泉」、˦i˦da: po「主人」、˦ta ˦i˦ga「くるみ」

##### 3. 3音節語

˦i˦lɔ ˦m˦bu tɕ˦e「象」、˦ta p˦he: p˦he:「蝶」、˦t˦aʔ ˦t˦aʔ ˦tɕe「織機」

##### 4. 4音節語

˦i˦do ˦i˦dze p˦a ˦lã「ダイヤモンド」、˦tə ma ˦dze t˦i「垢」、˦kɔ ˦i˦dza ˦laʔ ˦i˦dza「ムカデ」

3、4音節語と考えられるものの中には、1～2音節ごとに個別の声調を担うものもある。たとえば<sup>h</sup>dzɛ: 'ka: ra「蜘蛛」、<sup>h</sup>ʔa ts<sup>h</sup>u 'mbo ro「頬」などがある。

3.1で触れたように、場所・時間などを表す名詞はそれ自体位格に置かれていると解釈できる一方、普通の名詞と同様にふるまい、文法格による標示が行われることも可能である。たとえば、次のような名詞がある。

- 場所：<sup>h</sup>jo ɣo ma「左」、<sup>h</sup>nō tɕ<sup>h</sup>a「内側」、<sup>h</sup>ʔo?「上」
- 時間：<sup>h</sup>ta ri「今日」、<sup>h</sup>ja mo「朝」、<sup>h</sup>shō p<sup>h</sup>e?「来年」

ただし、場所を表す名詞は位格標識を伴うことが多い。

語構成について見ると、次のような接尾辞がよく見られる：/pa, ba, ma, wa, po, mo, wo/。いずれも語彙的に決まっており、基本的に生産的であるとは言えない。特徴的なのは/wa/で、本来語・外来語を問わず各種地名に付加されて「～（出身）の人」の意味を表す、数少ない生産的な接辞である。

動詞の名詞化接辞については、独立した節 3.5 を設けている。

### 3.3 代名詞

人称代名詞と指示詞に分けて述べる。

#### 3.3.1 人称代名詞

人称代名詞は、人称と数が区別される。

表4：人称代名詞一覧

人称	単数	不特定複数	特定複数（2を例に）
1	'ja	'ja ts <sup>h</sup> o	'ja <sup>h</sup> ɲi: 'ja rə ts <sup>h</sup> o [排除]
2	<sup>h</sup> tɕ <sup>h</sup> o?	<sup>h</sup> tɕ <sup>h</sup> u? ts <sup>h</sup> o	<sup>h</sup> tɕ <sup>h</sup> o: <sup>h</sup> ɲi:
3	<sup>h</sup> k <sup>h</sup> o	<sup>h</sup> k <sup>h</sup> o ts <sup>h</sup> o	<sup>h</sup> k <sup>h</sup> o <sup>h</sup> ɲi:

「数」は基本的に単数、不特定複数、特定複数が区別される。特定複数とは数詞を含む複数形式である。以上の例では「2」を用いているが、「3」や「4」に置き換えることができる<sup>10</sup>。このうち、1人称の「2数」には聞き手の「包括」と「排除」が区別される。複数を表す/ts<sup>h</sup>o/<sup>11</sup>は [ts<sup>h</sup>o, tso, dzo, zo] のいずれでも発音される。

「性」はいずれの人称においても区別されない。

「敬称」はいずれの人称においても認められない。

<sup>10</sup> 理屈の上ではどんな自然数でも入るが、実際の使用では2～5ぐらいが多くを占める。

<sup>11</sup> 形態素的には集合標識であり、複数標識ではないが、代名詞に付加されているものは、先行する形態素とともに1語とみなし、語釈においても[複]と記す。

1 人称単数は、属格について格標識を伴う形式とともに、代名詞語幹の音形の異なりだけで表すことができる。次のようにまとめられる。

表 5：人称代名詞の語幹交替

格	1 人称単数	2 人称単数	3 人称単数
絶対格	ʼŋa	ˈtɕʰoʔ	ˈkʰo
属格	ʼŋa / ʰŋa-gə	ˈtɕʰoʔ-gə	ˈkʰo-gə

表 5 の異なりは、たとえば次のように現れる<sup>12</sup>。

- (1) a ʼŋa ʼpo mo-∅ ʼreʔ  
 1.[属] 娘-[絶] [判]  
 (彼女は) 私の娘です。
- cf. b ʼŋa-∅ ʼpo mo-∅ ʼji:  
 1-[絶] 娘-[絶] [判/E]  
 私は (彼の) 娘です。

### 3.3.2 指示代名詞

指示詞は近称、遠称が体系的に区別される。近称は基本的に話し手の手の届く範囲を示す。遠称は話し手の手の届かない範囲ではあるがあまり離れていない範囲を示す。話し手からかなりの距離がある範囲を示す形態が認められ、超遠称と呼んでおく。指示詞にさまざまな形態素を伴い、場所や様態を示すことができるが、近称の場所には形態の異なる例が認められる。超遠称は遠称の重複形で、指示詞単独でのみ用いられる。

表 6：指示代名詞一覧

	近称	遠称
指示詞	ˈnɔ / ˈnɔ / ˈʔə nɔ	ˈpʰa ru / ˈpʰa lu
集合	ˈnɔ tsʰo	ˈpʰa ru tsʰo / ˈpʰa lu tsʰo
場所	ˈnɔ nə / ˈʔa na	ˈpʰu na
方向	ˈnɔ ɕʰoʔ	ˈpʰa ru ɕʰoʔ
様態	ˈnɔ ʳda / ˈʔə ʳda	ˈtə ʳda

集合形は主に人について用いられる。場所形は位置または方向を示す。

指示詞は代名詞の機能と形容詞の機能を兼ねる部分がある。指示形容詞として用いる場合、中心語に前置することも後置することも可能である。前置される指示形容詞は、後続する名詞とは異なる声調領域の独立の声調を持つ。これらが単なる指示形容詞として、ただしその指示力がほぼ失われた状態として用いられるとき、名詞に後置され、かつ独立した声調を担わない。

<sup>12</sup> 本稿における動詞にかかわる語釈には若干の注意が必要である。特に存在動詞と TAM を表す接辞群には特別の語釈の方法を適用する。4.2.2, 4.6.1 および本稿末尾の付録を参照されたい。

- (2) a  $\text{'}\text{nd}\text{ə}$                        $\text{'}\eta\alpha:\text{ }\eta\delta\text{-}\emptyset$      $\text{'}\text{s}^{\text{h}}\text{u}\text{-}\emptyset$      $\text{'re?}$   
 この                      子供-[絶]    誰-[絶]    [判]  
 この子供は誰ですか？
- b  $\text{'}\eta\alpha:\text{ }\eta\delta\text{-}^{\text{n}}\text{d}\text{ə}\text{-}\emptyset$      $\text{'}\text{s}^{\text{h}}\text{u}\text{-}\emptyset$      $\text{'re?}$   
 子供-この-[絶]    誰-[絶]    [判]  
 この子供は誰ですか？
- (3)  $\text{'}\eta\text{a na}$      $\text{'p}\tilde{\text{i}}\text{ ga-}\emptyset$                        $\text{'}\text{h}\text{t}\text{e? me?}$      $\text{'jo?}$   
 ここ    ビスケット-[絶]    少し                      [存]  
 ここにビスケットが少しあります。
- (4)  $\text{'}\eta\text{ə}^{\text{n}}\text{da}$                        $\text{'}\eta\text{ə-re?}$   
 このような    [疑]-[判]  
 このようですか？

### 3.4 疑問語

疑問語は名詞句もしくはその一部を占める要素として機能するものに加え、副詞的に機能したり単独で述語になるものもある。ここで一括して記述する。

Lhagang 方言の疑問語には次のようなものがある。

表 7：疑問語一覧

形態	語義
$\text{'}\text{s}^{\text{h}}\text{u}$	誰
$\text{'}\text{t}\text{e}\text{ə t}\text{ə}$	何
$\text{'}\text{k}\text{a na}$	どこ
$\text{'}\text{t}\text{e}^{\text{h}}\text{u ts}^{\text{h}}\text{e? 'ka}$	いつ (何時)
$\text{'}\text{t}\text{e}\text{ə t}\text{ə re? te}$	どのように
$\text{'}\text{t}\text{e}\text{ə ts}^{\text{h}}\text{e?}$	どれぐらい

疑問語には疑問文に用いられ疑問を表すものと、平叙文に用いられ疑問を表さないもの（不定名詞、不定形容詞など）に分かれる。構造上はほぼ区別されないが、不定用法の場合、肯定文は譲歩を表す接続詞 $\text{'na}$ を伴う文の中に現れる傾向がある。以下では、疑問と不定の例をともに記述する。

#### $\text{'}\text{s}^{\text{h}}\text{u}$ 「誰」

人について尋ねるときに用いる。複数形に $\text{'}\text{s}^{\text{h}}\text{u s}^{\text{h}}\text{u} / \text{'}\text{s}^{\text{h}}\text{u ts}^{\text{h}}\text{o}$ <sup>13</sup> 「誰々」がある。前者は複数の特定の人物を列挙した答えを要求するときに用いられ、後者は誰かを代表とした集合の答えを要求するときに用いられる。

<sup>13</sup> 第2の形式は「誰」に人称代名詞の集合標識が付加されたものである (3.3.1 を参照)。

- (5) ʔtʰoʔ-∅ ʔsʰu-∅ ʔji:  
2-[絶] 誰-[絶] [判/E]  
あなたは誰ですか？
- (6) ʔtʰoʔ tsʰo ʔnō-la ʔsʰu sʰu-∅ ʔjo:reʔ  
2.[複] 家-[位] 誰.[複]-[絶] [存]-[判]  
あなたたちの家には誰々がいますか？
- (7) ʔnə-∅ ʔsʰu tsʰo-gə ʔkʰō mba-∅ ʔreʔ  
これ-[絶] 誰.[複]-[属] 家-[絶] [判]  
これは誰の家ですか？

不定名詞の例は以下のようなものである。

- (8) ʔsʰu-∅ ʔji: ʔna ʔtʰe:lə reʔ  
誰-[絶] [判] ても 知っている-[未]  
誰でも知っているでしょう。
- (9) ʔsʰu-ʰtʰe:ʔ-gə ʔŋa-∅ ʔfi dē la ʔmə-ʰdzə-tu  
誰-一-[能] 1-[絶] [否]-信じる-[証]  
誰 1 人私を信じてくれませんか。

### ʔtʰə tə 「何」

事物についてたずねるときに用いる。

- (10) ʔtʰoʔ-la ʔmī-∅ ʔtʰə tə-∅ ʔhta:reʔ  
2-[与] 名前-[絶] 何-[絶] という名前である-[判]  
あなたは名前を何というのですか？

不定名詞の例は以下のようなものである。

- (11) ʔtʰə tə ʔsʰo: tʰa:la ʔta: rəʔ ʔŋi:∅ ʔjoʔ reʔ  
何 動物-[与] ても 心臓-[絶] [存]  
どんな動物でも心臓があります。

ʔtʰə という 1 音節でも用いられるが、疑問を表さないことがある。

- (12) ʔŋa-la ʔtʰə ʔna-ʰdzə-∅ ʔmeʔ-tu  
1-[与] 何 病気だ-[名]-[絶] [存/否]-[証]  
私には何も病気になるものはありません。(=私は何の病気もしていません)

### ʔtʰə 「どんな」

疑問形容詞と呼べる。名詞に後続し、格標識がさらに後続する。

- (13) ʔtʰoʔ-la ʔhsā tʰe ʔtʰə-∅ ʔjo:  
2-[与] 意見 どんな-[絶] [存]  
あなたはどんな意見がありますか？

**˘ka na 「どこ」**

場所についてたずねるときに用いる。名詞、位置、方向を表すとき、疑問詞単独で出現するほか、各種格標識を付加することで場所にかかわるさまざまな疑問文を形成することができる。

名詞<sup>14</sup>

- (14) ˘tɕʰoʔ ˘pʰa ji:-∅ ˘ka na ʼreʔ  
 2.[属] 故郷-[絶] どこ [判]  
 あなたの故郷はどこですか？

位置

- (15) ˘ka na ˘n duʔ-jo:  
 どこ いる-[継]  
 (あなたは) どこに住んでいるのですか？

方向

- (16) ˘ka na ˘n dɔ-go  
 どこ 行く-[必要]  
 (あなたは) どこに行きたいですか？

起点を表す場合は奪格標識を用いる。

- (17) ˘tɕʰoʔ tsʰo-∅ ˘ka na-nə ˘fið-zə ji:  
 2.[複]-[絶] どこ-[奪] 来る-[過]  
 あなたたちはどこから来ましたか？

人の出身を尋ねる場合は属格標識を用いる。

- (18) ˘tɕʰoʔ-∅ ʼta: n do ˘ka na-gə ʼreʔ  
 2-[絶] [地名] どこ-[属] [判]  
 あなたはダルツェンドのどこの人ですか？

不定名詞の例は以下のようなものである。

- (19) ˘ka na ʼma-ji:-sʰa ʼtsi ɣi-∅ ˘ji:-tu  
 どこ [否]-[判]-[名] ねずみ-[絶] [判]-[証]  
 どこであろうと、ねずみ(ばかり)です。

- (20) ʼmə ˘n dɔ ˘n dɔ-∅ ˘ka na ʼji: ˘na ˘jo:-reʔ  
 人 このような-[絶] どこ [判] ても [存]  
 こんな人はどこにでもいます。

**˘tɕʰu tsʰeʔ ˘ka 「いつ」**

時間についてたずねるときに用いる。形態的に分析すると「どれくらいの時間」となるが、実際の用法としては単に「いつ」の意味で用いられる。時間について「何時」と尋ねる場合に

<sup>14</sup> この場合は統語上疑問詞「どこ」は名詞として機能しているが、絶対格は付加しない。



は/ṽtɕʰu tsʰoʔ ṽtɕʰu tsʰeʔ ʼka/<sup>15</sup> となる。

- (21) a ṽtɕʰoʔ-∅ ṽtɕʰu tsʰeʔ ʼka ʰtseʔ-zə ji:  
 2-[絶] いつ 到着する-[過]  
 あなたはいつ到着したのですか？
- b ṽtɕʰoʔ-∅ ṽtɕʰu tsʰoʔ ṽtɕʰu tsʰeʔ ʼka ʰtseʔ-zə ji:  
 2-[絶] 何時 到着する-[過]  
 あなたは何時に到着したのですか？

不定副詞の例は以下のものである。

- (22) ṽtɕʰoʔ-∅ ṽtɕʰu tsʰeʔ ʼka ˀkʰɔ̃ ˀna ʼŋa tsʰo ʼnɔ̃-la ʼfið nə  
 2-[絶] いつ 暇だ ても 1.[複] 家-[位] 来る て  
 ʰŋɛ:lə reʔ  
 できる-[未]  
 あなたは暇な時いつでも私たちの家に来ていいです。

### ṽtɕə ʰda 「どのようだ」

これは疑問副詞のほか、疑問形容詞として機能するため、次のように、動詞句用の接辞、名詞化接辞が付加される。3.9 および 4.4 の形容詞の記述を参照。

- (23) a ˀndə ˀmə-∅ ṽtɕə ʰda-tu  
 この 人-[絶] どのようだ-[証]  
 この人はどんなようですか？
- b ˀndə ˀmə-∅ ṽtɕə ʰda-ʰtɕiʔ-∅ ʼreʔ  
 この 人-[絶] どのようだ-[名]-[絶] [判]  
 この人はどんな人ですか？

不定副詞の例は以下のものである。

- (24) ṽtɕʰoʔ-∅ ṽtɕə ʰda ʼle: nə ʰŋɛ:lə reʔ  
 2-[絶] どのように する て できる-[未]  
 あなたはどのようにしてもいいです。

### ṽtɕə ʰda zə nə / ṽtɕə tə reʔ te 「どのように」

方法、様態についてたずねるときに用いる。

- (25) ṽtɕʰoʔ-∅ ˀndə nɔ̃ ṽtɕə ʰda zə nə ʰfið-zə ji:  
 2-[絶] ここ どのように 来る-[過]-[判]  
 あなたはここへどのように来たのですか？

### ṽtɕə tsʰeʔ 「どれぐらい、いくら」

数量についてたずねるときに用いる。

<sup>15</sup> 形態素分析をすると、/ṽtɕʰu tsʰoʔ/「時間」+/ṽtɕʰu tsʰeʔ ʼka/「いつ」となるが、ここでは語釈としてひとかたまりで「何時」と示す(21b)。

(26) ʼni ma ʼtɕə tsʰe? ʼndu? ʼtɕʰo?  
 日にち いくら いる できる  
 (あなたは) 何日いることができますか?

(27) ʼtʰa pa-∅ ʼtɕə tsʰe? ʼjoʔ-re?  
 僧-[絶] どれくらい [存]-[判]  
 僧侶はどれくらいいますか?

不定形容詞の例は以下のようなものである。

(28) ʼŋa-∅ ʼtā: ʼtɕə tsʰe? ʰɕoʔ ʼna ʼŋa-∅ ʼtə-∅ ʰno-li:  
 1-[絶] お金-[絶] どれくらい 使う ても 1-[絶] それ-[絶] 買う-[意]  
 私はお金をいくら使っても、それを買います。

### ʼtɕə tə re: ʰtsə re? 「なぜ」

理由を尋ねる場合、固定された表現はなく、形態的に分析すると「どのような理由で」となる句を「なぜ」の意味で用いることになる(例文 29)ほか、複文の形式を取る場合(例文 30)もある。

(29) ʼtɕʰoʔ-∅ ʼtɕə tə re: ʰtsə re? ʰda ʰda ʼtɕʰə nə ʼfio:-na  
 2-[絶] なぜ このように 遅い 来る-[調]  
 あなたはなぜこのように遅く来たのですか?

(30) ʼtɕʰoʔ-∅ ʰkɛʔ tɕʰa ʼɕe: ʼmə-ŋɛ: ʼnə ʼtɕə ʼre?  
 2-[絶] 話をする [否]-できる なら どんな [判]  
 あなたはなぜしゃべらないのですか?

## 3.5 名詞化標識

頻繁に見出される名詞化標識には/ʰkʰɛ/、/sʰa/、/ʰdzɯ/がある。名詞化標識はほとんどの場合、名詞と同じく直後に格標識がつく。また、別の名詞に先行して、修飾句となったり、主部内在型の構造を取ることでもできる。

/ʰkʰɛ/は/-xe/という異形態をもち、動詞語幹および形容詞語幹に後続して「人、行為者」を表す名詞句を作ることができる。そのほか、その直後に/-mə/を伴い、全体として「～する人」を意味する名詞句の一部となる。別の名詞に先行して、修飾句となるときには、名詞化される動詞の行為を行うものが「人」に限定されない。

/sʰa/は動詞語幹に後続して「場所」を表す名詞句を作ることができる。/sʰa/がついた状態で1つの名詞と分析することも可能である。ほかにも、単なる動詞の名詞化する機能も認められる。

/ʰdzɯ/は事物を表す名詞句を作る。

ほかに、動詞の TAM 接辞に用いられる一部の接辞と形態論的に共通する形式/-zə, -lə/などが統語上のふるまいとして、名詞化標識と分析される例(たとえば(33)など)が認められる。/-zə/は「～したこと」(過去)を意味し、/-lə/は「～すること」(非過去)を意味する。

名詞化標識を伴う名詞句の例は以下のようである。

表 8 : 名詞化標識を伴う名詞句

名詞化前	名詞化後
ʼŋo ʼç <sup>h</sup> e: 「知り合う」	ʼŋo ʼç <sup>h</sup> e:-ŋ <sup>h</sup> k <sup>h</sup> ε 「知り合い」
ʼla ʼfi <sup>h</sup> zo 「仏像を作る」	ʼla ʼfi <sup>h</sup> zo-xε 「仏像彫刻家」
ʼk <sup>h</sup> ε: ma ʼh <sup>h</sup> tsə 「牛を入れる」	ʼk <sup>h</sup> ε: ma ʼh <sup>h</sup> tsə-s <sup>h</sup> a 「牛小屋」
ʼza 「食べる」	ʼza-fi <sup>h</sup> dzɯ 「食べもの」
ʼza ma ʼza 「ごはんを食べる」	ʼza ma ʼza-go-ŋ <sup>h</sup> k <sup>h</sup> ε 「ごはんをこれから食べる人」
	ʼza ma ʼza-ts <sup>h</sup> a:-ŋ <sup>h</sup> k <sup>h</sup> ε 「ごはんを食べ終わった人」

名詞化標識を伴う名詞句が文中に現れる場合の例は以下のようである。

- (31) ʼluʔ ʼfi<sup>h</sup>gε-∅ ʼhso-ŋ<sup>h</sup>k<sup>h</sup>ε-∅ ʼjoʔ-lə reʔ  
 羊-[絶] 飼う-[名]-[絶] [存/疑]  
 羊を飼う人はいますか？
- (32) ʼʔa ʼn<sup>h</sup>do ʼh<sup>h</sup>kεʔ-∅ ʼfi<sup>h</sup>dzɔ-s<sup>h</sup>a-∅ ʼh<sup>h</sup>tsa-lə ʼma reʔ  
 アムドチベット語-[絶] 学ぶ-[名]-[絶] 簡単な-[否/判]  
 アムドチベット語を学ぶのは簡単ではありません。
- (33) ʼn<sup>h</sup>də-∅ ʼh<sup>h</sup>[a ʼç<sup>h</sup>i-gə ʼti-zə ʼʔə-reʔ  
 これ-[絶] [人名]-[能] 書く-[名] [疑]-[判]  
 これはタシが書いたものですか？

次の文は 2 通りの解釈ができる<sup>16</sup>。

- (34) ʼk<sup>h</sup>o ts<sup>h</sup>o-∅ ʼrə ʼŋo-nə ʼma: lə ʼfi<sup>h</sup>o:-zə ʼreʔ  
 3.[複]-[絶] 山-[奪] 下へ 来る-[過] [判]  
 a 彼らは山から下りてきた人たちです。(名詞化の読み；語釈は直前の通り)  
 b 彼らは山から下りてきました。(動詞接辞群の読み；語釈の最後の [判] は不要<sup>17</sup>)

以上のほかに、/fi<sup>h</sup>dzɯ/も認められ、主に「行為」を表す名詞句を形成する場合に用いられる。

その際動詞に接尾辞がある場合、その後ろに置かれる。

- (35) ʼtç<sup>h</sup>oʔ-∅ ʼma: tç<sup>h</sup>ā-∅ ʼfi<sup>h</sup>dzɔʔ-fi<sup>h</sup>dzɯ-la ʼʔə-fi<sup>h</sup>ga  
 2-[絶] 麻雀-[絶] する-[名]-[与] [疑]-好む  
 あなたは麻雀をするのが好きですか？

<sup>16</sup> 厳密に言えば、(34) に示した語釈に従うと a の意味で理解される。ところが、実際の発話において、文末の判断動詞が実際に声調を担っているかどうかは分かりにくい。声調を担っていない分析をすると、b の読みになる。

<sup>17</sup> すなわち、/zə reʔ/ で 1 つの単位を形成し、それに対して [過] の語釈が与えられるためである。4.6.1 を参照。

- (36) ʰdə-∅      ʰŋa-∅      ʰle:-go-<sup>fi</sup>dzɯ-∅      ʰji:-re?  
 これ-[絶]    1-[絶]    する-[必要]-[名]-[絶]    [判]-[判]  
 これは私がすべきことです。

名詞化した名詞句は修飾句になれるが、例文を見る限り被修飾語（句）に前置されるものと主部内在型をとるものに分かれる。

- (37) ʰpoʔ ko:-∅      ʰtɕō-<sup>ŋ</sup>kʰɛ      ʰŋa: ɲō-∅-tə      ʰka na      ʰtʰe:  
 チベット服-[絶]    着る-[名]    子供-[絶]-[主]    どこ    去る  
 チベット服を着た子はどこへ行ってしまいましたか？

- (38) ʰkʰo-gə      ʰza ma-∅      ʰle:-zə-∅-tə      ʰmə-zĩ-tu  
 3-[能]    おかず-[絶]    作る-[名]-[絶]-[主]    [否]-おいしい-[証]  
 彼が作ったおかずはおいしくありません。

### 3.6 位置名詞の文法化

特定の位置を表す名詞は、別の名詞に後続し、それと同一の声調領域を形成しつつ、かつ直後に位格標識を伴っても伴わなくてもよい、という環境で現れる。このような語は名詞が格標識と似たふるまいをする形態への変化の途上、すなわち文法化の過程にあるといえる。分析上は位置名詞の後ろにゼロ形態の位格があるものと理解しておく。このような名詞には、<sup>ʰ</sup>go/「～の上」、/nō/「～の中」などがある。

たとえば、以下のようなものである。

- (39) ʰtɕʰoʔ-∅      ʰkʰuʔ ma-∅      ʰto dzə-<sup>ŋ</sup>go      ʰi:zəʔ-mo  
 2-[絶]    かばん-[絶]    テーブル-[位名]    置く-[調]  
 かばんをテーブルの上に置きなさいよ。

- (40) ʰŋa-∅      ʰtɕō-nō      ʰŋdo-li:  
 1-[絶]    街-[位名]    行く-[意]  
 私は街の中へ行きます。

### 3.7 数詞・量詞

ここでは基数詞、序数詞、不定標識、集合標識、量詞について記述する。

#### 3.7.1 基数詞

以下に 1 から 29 までの形態を示す。

表9：基数詞（1～29）

	+10	+20
0	<sup>-h</sup> tɕu	ʼni ɕ <sup>h</sup> u
1	<sup>-h</sup> tɕiʔ	ʼni ɕ <sup>h</sup> u ʰtɕa ʰtɕiʔ
2	<sup>-fi</sup> ni:	ʼni ɕ <sup>h</sup> u ʰtɕa <sup>fi</sup> ni:
3	<sup>-h</sup> sũ	ʼni ɕ <sup>h</sup> u ʰtɕa <sup>h</sup> sũ
4	<sup>-fi</sup> zə	ʼni ɕ <sup>h</sup> u ʰtɕa <sup>fi</sup> zə
5	<sup>-fi</sup> ŋa	ʼni ɕ <sup>h</sup> u ʰtɕa <sup>fi</sup> ŋa
6	ʼtuʔ	ʼni ɕ <sup>h</sup> u ʰtɕa tuʔ
7	<sup>-fi</sup> dõ	ʼni ɕ <sup>h</sup> u ʰtɕa <sup>fi</sup> dõ
8	<sup>-fi</sup> dzɛʔ	ʼni ɕ <sup>h</sup> u ʰtɕa <sup>fi</sup> dzɛʔ
9	<sup>-fi</sup> gu	ʼni ɕ <sup>h</sup> u ʰtɕa <sup>fi</sup> gu

「1」は名詞とともに用いられるとき、/ʰtɕiʔ/という異形態をもつ。

10台の数は基本的に「10」と「1の位」の形態素を並列する形になるが、各形態素の細部に異なりが認められる。

20台の数は「20 + つなぎの要素/<sup>h</sup>tɕa/<sup>18</sup> + 1の位」で表し、「30」以降のきりの悪い数字も20台と同様の構成を取る。

30から100までのきりのよい数は以下のようになる。

<sup>-h</sup>sũ tɕu 「30」

<sup>-fi</sup>zə <sup>h</sup>tɕu 「40」

<sup>-fi</sup>ŋa <sup>h</sup>tɕu 「50」

ʰtu <sup>h</sup>tɕu 「60」

<sup>-fi</sup>dõ tɕu 「70」

<sup>-fi</sup>dza <sup>h</sup>tɕu 「80」

<sup>-fi</sup>gu <sup>h</sup>tɕu 「90」

<sup>-fi</sup>dza t<sup>h</sup>ã mba 「100」

「100」は単独で用いる場合、形態素/<sup>-fi</sup>dza/「100」に/t<sup>h</sup>ã mba/「ちょうど」を伴う形式が用いられる。「100」から「199」までは「/<sup>-fi</sup>dza/+də/+各種1～2けたの数」を並列して構成する。「200」「300」などは、それぞれ<sup>-fi</sup>ni: <sup>fi</sup>dza、<sup>-h</sup>sũ <sup>fi</sup>dzaのように構成される。

「1000」以上の数詞には以下のようなものがある。

<sup>-h</sup>tõ / <sup>-h</sup>tõ t<sup>h</sup>aʔ <sup>-h</sup>tɕiʔ 「1000」

t<sup>h</sup>ə / t<sup>h</sup>ə ts<sup>h</sup>aʔ <sup>-h</sup>tɕiʔ 「10000」

「2000」「20000」などの形式は、上の右側の形式の最後の音節の数詞を「2」に替えることによって構成される。

基数詞は算数の表現において名詞と同等の扱いを受ける。

<sup>18</sup> 声調は後続の1の位とともに1つの声調領域を形成する。

- (41) ʰtɕiʔ-ŋgo-la ʰni:-∅ ʰnõ ʰna ʰsũ-∅ ʰreʔ  
 一-[位名]-[位] 二-[絶] 足す と 三-[絶] [判]  
 1 足す 2 は 3 です<sup>19</sup>。

例文 (41) のように、基数詞は位置名詞 (3.6 参照) を伴うことができ、文の構造から絶対格 (ゼロ形態) として扱われることになる (3.8 参照)。

### 3.7.2 序数詞

序数詞は基本的に基数詞に /-ʔã/ を先行させ、かつ基数詞に /-pa/ を後続させることによって形成される。たとえば /-ʔã ʰni:-pa/ 「第2」などのようである。ただし「第1」は /-ʔã ʰtã mbo/ となる点に注意が必要である。

### 3.7.3 不定標識

不定標識は名詞句において数詞の位置に現れる数量表現である。形態的には /-ziʔ/ で、語源的には数詞「1」 /-ʰtɕiʔ/ と関連するが、特定数を表すものではない。

- (42) ʰŋa-ʰke fia ʰji ge ʰsa: pa-ziʔ-∅ ʰno-roʔ  
 1-[領] 本 新しい-[不定]-[絶] 買う-[調]  
 私に新しい本を買ってください。

### 3.7.4 集合標識

集合標識は 3.3 で触れたように、代名詞とともに現れるが、名詞に後続する場合もある。集合標識とは、複数標識と異なり、先行する名詞の複数性を示すものではない。特に人名に後続する場合、それが意味するのは「～家の人々/一家」となる。

- (43) ʰndə-∅ ʰwɔ ʰdɛ-tsʰo-gə ʰkʰɔ mba-∅ ʰreʔ  
 これ-[絶] [人名]-[集]-[属] 家-[絶] [判]  
 これはワンデ家の家です。

### 3.7.5 量詞

量詞は大きく類別詞と計量の単位 (度量衡の単位を含む) に分けられるが、前者は Lhagang 方言には認められず、名詞 (句) に直接数詞を後続させることができる。また、度量衡の単位は漢語をそのまま用いることもある。

量詞を含む語順は「名詞+量詞+数詞」である。何らかの容器による単位を表す場合、「1」に /kʰɔ/ が用いられる。また、「1」の場合は声調を担わず、先行名詞 (もしくは量詞) とともに 1 つの声調領域を形成することがある。

<sup>19</sup> 直訳すれば「1の上に2を足すならば3です」となる。

- (44) a ˈmə {ˈhʰtʰeiʔ / ˈtʰeiʔ}  
 人 1  
 1 人の人  
 b ˈmə ˈfiː  
 人 2  
 2 人の人

- (45) ˈxɛj tsə ˈtʰa ˈhʰtʰeiʔ  
 靴 対 1  
 1 そろいの靴

- (46) ˈtʰɔ̃ ˈtā mbi ˈkɔ̃  
 酒 瓶 1  
 1 瓶の酒

量詞と数詞のみからなる句が名詞を修飾せず独立して用いられることもある。

- (47) ˈta rɔʔ ˈpʰu rə ˈkɔ̃-∅ ˈza  
 もう 碗 1 食べる  
 もう 1 碗食べなさい。

### 3.8 格体系

Lhagang 方言は、文法格として複数項を取る動詞（4.3 参照）の行為者をマークする能格型の格体系を持つ<sup>20</sup>。

#### 3.8.1 格標識一覧表

Lhagang 方言における格標識の一覧は次のとおりである。

表 10：格標識一覧

形式	S/A/P 標示	非 S/A/P 標示
無標 (∅)	絶対格	(位格)
gə	能格	具格/属格
la / lə	与格	位格
də	共格	
nə		奪格
hʰke fia		受領格
jiː / leː		比較格

Lhagang 方言は、文法格として絶対格、能格、与格、共格が認められ、S/A/P の標示を担う。これらの格は動詞が要求することが通常であるが、厳密な格支配関係を認めるのではなく、特

<sup>20</sup> 格体系の記述は澤田編 (2010) を参考にしている。

に能格標示については語用論的な側面が強い<sup>21</sup>。

格標識を形態論的に見た場合、ゼロ形態を含めても7種類が区別されるだけであるが、格の名称はその機能によってある程度下位区分を設ける。非 S/A/P 標示については語用論的な省略が認められない傾向にある、といった面も考慮される。

絶対格は無標であり、例文中に  $\emptyset$  で示す。また位格もしばしば音形が省略され、絶対格と区別ができなくなるが、文中での役割が異なっている。本稿の例文において、音形式の認められない位格は一律表示していない。これは 3.2 で述べた場所・時間を表す名詞、および 3.6 で述べた位置名詞などに当てはまる。

格標識は独立して名詞句を形成することはできない。ただし共格は独立の声調を担い、接続詞として機能する事例も認められる。

また、格標識の連続は認められない。

なお、人称代名詞の属格は形態（声調）変化によって標示する。詳細は 3.3.1 を参照。

### 3.8.2 用法

以下、文法格（S/A/P 標示）、非文法格（非 S/A/P 標示）の順に、簡潔に用法を記述する。

#### 文法格：絶対格（ $-\emptyset$ ）

絶対格の用法としては、判断動詞の S および補語、存在動詞の S および所有者、1 項動詞の S、多項動詞の被動者 P、多項動詞の行為者 A、使役文における被使役者などがある。

判断動詞の S および補語

- (48)     $\text{'tə-}\emptyset$          $\text{'tõ } \text{ᵐk}^{\text{h}}\text{u:}\text{-}\emptyset$      $\text{'re?}$   
          それ-[絶]   マニ車-[絶]   [判]  
          それはマニ車です。

存在動詞の S

- (49)     $\text{'ŋa-la}$      $\text{ᵐk}^{\text{h}}\text{õ ba}$      $\text{ᵐni:}\text{-}\emptyset$      $\text{'jo?}$   
          1-[与]   家            2-[絶]   [存]  
          私には家が2軒あります。

1 項動詞、形容詞述語の S

- (50)     $\text{'ŋa-}\emptyset$      $\text{'k}^{\text{h}}\text{a } \text{ᵐk}^{\text{h}}\text{ũ-tu}$   
          1-[絶]    のどが渇く-[証]  
          私はのどが渇きました。

多項動詞の被動者

- (51)     $\text{ᵐt}^{\text{h}}\text{o?}\text{-}\emptyset$      $\text{ᵐk}^{\text{h}}\text{o-}\emptyset$      $\text{'ŋo } \text{'?ə-}\text{ᵐe:}$   
          2-[絶]        3-[絶]    知り合いである [疑]-[語幹]  
          あなたは彼を知っていますか？

<sup>21</sup> DeLancy (2011) の記述もあわせて参照。



## 多項動詞の行為者

- (52) ʔtʰoʔ-∅ ʔtu wa-∅ ʔnʰɔ-lə ʔə-reʔ  
 2-[絶] たばこ-[絶] 飲む-[名] [疑]-[判]  
 あなたはたばこを吸いますか？

## 使役文の使役者

- (53) ʔa ma-∅ ʔja-la ʔkʰo rɔ: ʔko ze-∅ ʔtʰu:-hʰtʰuʔ-tʰe:  
 母-[絶] 1-[与] 自身の 服-[絶] 着る-させる-[完]  
 母は私に彼女自身の服を着させました。

文意が明確であれば、すべての文法格の表示が行われる名詞句は絶対格で現れうる。

- (54) ʔja-∅ ʔtʰoʔ-∅ ʔndə-∅ ʔzi:  
 1-[絶] 2-[絶] これ-[絶] 与える  
 私はあなたにこれをあげましょう。

## 文法格：能格 (-gə)

能格は多項動詞の行為者を示すが、中心語が名詞・代名詞にかかわらず、その使用は任意であり、行為者を強調したり対比したい場合に特に用いられる。ただし行為者が被動者より後に来る場合<sup>22</sup>は、ほぼ義務的に用いられる。これは文意の曖昧性の回避のために起こる現象であると考えられる<sup>23</sup>。

## 行為者が文頭にある場合

- (55) ʔkʰo-gə ʔpoʔ hʰkɛʔ-∅ ʔtʰe:-lə ʔə-reʔ  
 3-[能] チベット語-[絶] 知っている-[疑/未]  
 彼はチベット語が分かりますか？

## 行為者が被動者より後に来る場合

- (56) ʔndə-∅ ʔdo ʔdzɛ-gə ʔlɛ-zə reʔ  
 これ-[絶] [人名]-[能] 作る-[完]  
 これはドッジェが作りました。

## 被動者が発話に現れない場合

- (57) ʔja-gə ʔhso-zə ʔma-ji:  
 1-[能] 育てる-[過/否]  
 私が（それを）飼っているではありません。

原因を表す場合（無生物の行為者としての解釈<sup>24</sup>）

- (58) ʔliʃ kʰa-gə ʔtʰi pʰɔ-∅ ʔndzoʔ-kʰe:  
 風-[能] 木-[絶] 倒れる-[完]  
 風で木が倒れました。

<sup>22</sup> この語順の場合、日本語では受け身で訳すほうが意味的に近いと考えられる。

<sup>23</sup> LaPolla (1992) を参照。

<sup>24</sup> 例 (50) においては、動詞語幹に「倒れる」と「倒す」の区別が存在しないため、「風」に付加される /-gə/ が能格とも具格とも解釈することができる。

名詞句の中に現れる行為者を示すときにも能格標示が維持される。

- (59)    ʔtʰoʔ-∅    ʔŋa-gə    ʔtʰe:∅    ʔtʰeʔ-zə-∅-tə    ʔnō-la    ʔkʰu-sʰo:  
 2-[絶]    1-[能]    薪-[絶]    割る-[名]-[絶]-[主]    中-[位]    持つ-行く.[命]  
 あなたは私が割った薪を持って家の中へ入りなさい。

使役文の使役者も能格で現れうる。能格を用いた場合、使役者が故意に行った行為であることを強調する。

- (60)    ʔkʰo-gə    ʔluʔ ʰige    ʔtʰō tʰō    ʔni:∅    ʔtʰə-hʔtʰeʔ-kʰe:  
 3-[能]    羊    小さい    2-[絶]    死ぬ-させる-[完]  
 あなたは2匹の子羊を（わざと）死なせました。

能格が期待される場合に絶対格を用いるのも文法的に許容される。

- (61)    ʔŋa-∅    ʔndə-∅    ʔza-ŋe:lə ʔma-reʔ  
 1-[絶]    これ-[絶]    食べる-できる-[否/未]  
 私はこれを食べることができません。
- (62)    ʔŋa tsʰo-∅    ʔkʰo-la    ʔndə-∅    ʔza-kʰa    ʔma-hʔtʰeʔ  
 1.[複/包]-[絶]    3-[与]    これ-[絶]    食べる-[使]    [否]-させる  
 私たちは彼にこれを食べさせてはいけません。

### 文法格：与格 (-la)

文法格として機能する与格は特定の動詞と結びついて用いられる。動作動詞および感情動詞の場合は対象を、授与動詞の場合は受益者を、存在動詞の場合は所有者もしくは位置を、それぞれ標示する。特に存在動詞とともに現れる与格はたとえば場所を意味する名詞句についても省略されないため、文法格の与格に相当すると解釈する<sup>25</sup>。

- (63)    ʔŋa-∅    ʔtʰoʔ-la    ʔiga  
 1-[絶]    2-[与]    愛する  
 私はあなたを愛しています。
- (64)    ʔŋa-∅    ʔndə-la    ʔtʰeʔ-tu  
 1-[絶]    お化け-[与]    怖い-[証]  
 私はお化けが怖いです。
- (65)    ʔŋa-∅    ʔkʰo-la    ʔndə-∅    ʔzi:li:  
 1-[絶]    3-[与]    これ-[絶]    与える-[意]  
 私は彼にこれをあげましょう。
- (66)    ʔgwi ʰgwi    ʔnō tʰa-la    ʔde: ma-∅    ʔta: rəʔ    ʔə-ji:tu  
 キャビネット    中-[与]    皿-[絶]    まだ    [疑]-[存]-[証]  
 キャビネットの中にお皿はまだありますか？

<sup>25</sup> /-la/には表 10 のように、文法格としての「与格」と非文法格としての「位格」の2つの機能がある。存在動詞(4.2.2 参照)は「所有」「存在」「位置」を統語上の格標示によって表すため、ここでは「位格」ではなく「与格」となる。

また、3項動詞における受益者を表す場合にも用いられる<sup>26</sup>。

- (67) ʔ̄ŋa-la ʔ̄tɕʰə ʔ̄dza-∅ ʔ̄ja:-roʔ  
 1-[与] 元 100-[絶] 貸す-[調]  
 私に100元貸してください。

- (68) ʔ̄ŋa-la ʔ̄za ma-∅ ʔ̄hɕeʔ meʔ ʔ̄zi:-roʔ  
 1-[与] ごはん-[絶] 少し 与える-[調]  
 私にごはんを少しください。

加えて、使役文における被使役者も与格で表示される。

- (69) ʔ̄ŋo: ma-la ʔ̄la ji:∅ ʔ̄le:ʔɕuʔ-ʔ̄go  
 [人名]-[与] 民謡-[絶] 歌う-させる-[必要]  
 ドマに民謡を歌わせましょう。

### 文法格：共格 (-də)

文法格として機能する共格の例は多くはなく、特定の動詞と結びついて用いられる。

- (70) ʔ̄kʰo-∅ ʔ̄ŋaʔ ʔ̄d̄ ʔ̄tɕʰə ʔ̄tɕʰə-də ʔ̄ŋa ʔ̄ŋa-reʔ  
 3-[絶] 子供 小さい-[共] 同じだ-[判]  
 彼は小さな子供と同じです。

### 非文法格：属格 (-gə)

属格は所属、属性を表す際に用いられる。属格標識は/gə/である。

- (71) ʔ̄kʰo-gə ʔ̄pʰa ji:  
 3-[属] 故郷  
 彼の故郷
- (72) ʔ̄sh̄ɔ pʰeʔ-gə ʔ̄lo ʰse:∅ ʔ̄ŋa wa ʔ̄ŋi: pa-n̄ɔ ʔ̄reʔ-pa  
 来年-[属] 新年-[絶] 2月-[位置] [判]-[証]  
 来年の新年は2月でしょう。

属格標識で形成される名詞句が直接判断動詞の補語として用いられる場合がある。S/A/Pの表示にからむ点では属格標識の後ろにゼロ形態の絶対格が認められる余地があるが、ここではこの記述を省略する<sup>27</sup>。

- (73) ʔ̄kʰo tsʰo-∅ ʔ̄pō mbo ʔ̄ŋō ba-gə ʔ̄reʔ  
 3.[複] ボン教寺院-[属] [判]  
 彼らはボン教寺院の所属の人です。

### 非文法格：具格 (-gə)

具格は道具、材質、手段などを示す際に用いられる。

<sup>26</sup> ただし、与格で標示される項自体を省略することができる。

<sup>27</sup> 属格をめぐる格標示の構造については、さらに考察する必要がある。属格標識は名詞(句)に後続するため、「名詞化標識」ではないが、名詞の派生接辞という見方もある。

材質

- (74) ʔ<sup>n</sup>də-∅      ʔ<sup>h</sup>i:-gə    ʔ<sup>l</sup>e:-zə reʔ  
 これ-[絶] 木-[具] 作る-[過]  
 これは木でできました。(これは木製です)

道具

- (75) ʔ<sup>t</sup>ə<sup>h</sup>ə<sup>h</sup>gə    ʔ<sup>p</sup>hə lu tə-∅    ʔ<sup>l</sup>a mo-gə    ʔ<sup>pi</sup>?<sup>h</sup>ga-gə    ʔ<sup>h</sup>dzaʔ-zə reʔ  
 犬            あの-[絶]      [人名]-[能]    棍棒-[具]      打つ-[過]  
 あの犬はラモが棍棒で打ちました。

なお、/gə/という音形には多数の意味が存在し、次の例のように1文中に共起することもある。

- (76) ʔ<sup>t</sup>ə<sup>h</sup>oʔ-gə    ʔ<sup>h</sup>gā po-∅    ʔ<sup>h</sup>do<sup>h</sup>dze-gə    ʔ<sup>h</sup>təaʔ-gə    ʔ<sup>l</sup>ē-zə reʔ  
 2-[属]      箱-[絶]      [人名]-[能]    鉄-[具]      作る-[完]  
 あなたの箱はドツジェが鉄で作りました。

非文法格：受領格 (-<sup>h</sup>ke fia)

受領格は、動詞が特別に項として要求してはいないが、受益者・受領者を表すときに用いられる。与格と機能が重なっているところがあるが、受領格のほうが発話の中で「~のために」という意図を明確に表す。

- (77) ʔ<sup>ŋ</sup>a-<sup>h</sup>ke fia    ʔ<sup>ji</sup> ge    ʔ<sup>h</sup>sa: pa-zɪʔ-∅      ʔ<sup>ŋ</sup>o-roʔ  
 1-[領]      本      新しい-[不定]-[絶]    買う-[調]  
 私に新しい本を買ってください。
- (78) ʔ<sup>ŋ</sup>a-<sup>h</sup>ke fia    ʔ<sup>ji</sup> ge-zɪʔ-∅      ʔ<sup>ti</sup>-roʔ  
 1-[領]      手紙-[不定]-[絶]    書く-[調]  
 私に手紙を書いてください。
- (79) ʔ<sup>ŋ</sup>a-<sup>h</sup>ke fia    ʔ<sup>h</sup>go-tɕiʔ-∅      ʔ<sup>h</sup>i-roʔ  
 1-[領]      扉-[不定]-[絶]      開ける-[調]  
 私のために扉を開けてください。

非文法格：位格 (-la)

位格は無標の位置・方向を示す。文意が明快な場合は省略可能で、しばしばゼロ形態として現れる。

位置名詞に後続する位格は省略可能である。

- (80) ʔ<sup>pa</sup> t<sup>h</sup>aj-<sup>ŋ</sup>go-la                      ʔ<sup>t</sup>ə<sup>h</sup>ɔ̃ ʔ<sup>t</sup>ā bi    ʔ<sup>h</sup>zaʔ-jɪ:-tu  
 カウンター-[位置]-[位]    酒瓶                      置く-[継]-[証]  
 カウンターの上には酒瓶が置いてあります。

非文法格：奪格 (-nə)

奪格は時間・空間の起点を表す。

- (81) ʼŋa-∅ ʼla s<sup>h</sup>a-nə ʼfið-zə ji:  
1-[絶] [地名]-[奪] 来る-[過]  
私はラサから来ました。
- (82) -<sup>fi</sup>de <sup>fi</sup>ge-nə ʼla s<sup>h</sup>a ʼpa: ma ʼt<sup>h</sup>aʔ ʼri:lə ʼʔə-reʔ  
[地名]-[奪] [地名] 間 遠い-[未/疑]  
デルゲからラサまでの間は遠いですか？

### 非文法格：比較格 (-ji: / -le:)

比較格は比較対象を表し、2つの形式が認められる。これらは交換不可能であるが、その使い分けの基準は明らかではない。

- (83) ʼme toʔ-<sup>n</sup>də-∅ ʼp<sup>h</sup>a lu-gə ʼme toʔ-ji: ʼh<sup>h</sup>tɛ: ʒaʔ-tu  
花-この-[絶] あれ-[属] 花-[比] さらに よい-[証]  
この花はあの花よりきれいです。
- (84) ʼŋa-∅ ʼtɕ<sup>h</sup>oʔ-le: ʼlo ʼh<sup>h</sup>tɕu-∅ ʼtɕ<sup>h</sup>e-tu  
1-[絶] 2-[比] 年 10-[絶] 大きい-[証]  
私はあなたより 10 歳年上です。

以上のもの以外にも、比較は複文形式で表されることもある。

- (85) ʼmje:-∅ ʼn<sup>h</sup>ð ʼji: ʼh<sup>h</sup>tə ʼk<sup>h</sup>aʔ ʼfi<sup>h</sup>dzaʔ-nə ʒ<sup>h</sup>ẽ-tu  
薬-[絶] 飲む 比べる 点滴を打つ<sup>28</sup>-[名] 有効だ-[証]  
薬を飲むよりも点滴を打つほうがよいです。

### 3.9 形容詞：修飾用法として

Lhagang 方言における形容詞は、名詞に後続させて修飾語として用いられる場合と、動詞と共通する接辞をとって述語になる場合がある。ここでは、名詞を修飾する構造について述べる。修飾用法として用いられる形容詞の形態としては、以下のようなものが代表的である。

1. 重複語幹およびそれに準じるもの  
ʼn<sup>h</sup>go n<sup>h</sup>go 「曲がった」、ʼnaʔ naʔ 「黒い」、ʼfi<sup>h</sup>ma fi<sup>h</sup>ma 「低い」、ʼtɕ<sup>h</sup>ð tɕ<sup>h</sup>o 「小さい」
2. 1 音節語幹 + 接尾辞  
ʼtɕ<sup>h</sup>ə bu 「大きい」、ʼfi<sup>h</sup>dzaʔ mo 「重たい」、ʼfi<sup>h</sup>ni mba 「古い」、ʒa: xɛ 「よい」
3. 2 音節語  
ʼlo tɕ<sup>h</sup>ð 「若い」、ʼfi<sup>h</sup>lɛ fi<sup>h</sup>go 「平凡な」
4. 複合型  
ʼfi<sup>h</sup>dza tɕ<sup>h</sup>ə bu 「幅広い」(「幅」+「大きい」)、  
ʼfi<sup>h</sup>ma ʼs<sup>h</sup>e s<sup>h</sup>e 「真っ赤の」(「赤い」+ (強意))、

<sup>28</sup> 「点滴を打つ」という語は /k<sup>h</sup>aʔ/ 「針」と /fi<sup>h</sup>dzaʔ/ 「打つ」という複合語で表されるが、これは漢語の「打針」(点滴を打つ)の翻訳借用であろう。

ˈtʰa ˈfi dzɔ: pa 「太った」(「肉」+「太った」)、  
 ˈkō ˈfi de mo 「安い」(「値段」+「安らかな」)

修飾用法の場合、単音節語幹が単独で現れることはほとんどない。

重複タイプは、必ずしも第1音節と第2音節の音形式が同じになるとは限らない。また、重複それ自体は形態の一特徴であり、形容詞の修飾用法および単純な述語用法<sup>29</sup>であることを明示する以外に特別な意味機能があるわけではない。

文中で修飾語として用いられる場合、形容詞は被修飾名詞に後置されるのを基本とし、数詞は形容詞に後続する。形容詞が複数ある場合、数量を表す形容詞が最後に来る。

(86) a ɲa-la ˈme to? ˈfi ma: bo ˈtʰõ tʰõ-∅ ˈjo?  
 1-[絶] 花 赤い 小さい-[絶] [存]  
 私は小さい赤い花を持っています。

b ɲa-la ˈme to? ˈfi ma: bo ˈtʰõ tʰõ ˈmã bo-∅ ˈjo?  
 1-[絶] 花 赤い 小さい 多くの-[絶] [存]  
 私は多くの小さい赤い花を持っています。

名詞化による修飾句は被修飾語に前置される。

(87) ɲa-la ˈtʰo?-gə ˈtʰe: zə ˈme to? ˈtʰõ tʰõ ˈmã bo-∅ ˈjo?  
 1-[絶] 2-[能] 摘む-[名] 花 小さい 多くの-[絶] [存]  
 私はあなたの摘んだ多くの小さい花を持っています。

### 3.10 主題標識

主題標識は/tə/で、語用論的に特定の名詞句を主題化したいときに格標識の後ろに現れ、同時に名詞句の終止を示す。また、息継ぎ、あるいは考えながら発話するときのフィラーとして機能する場合があります、必ずしも付加された名詞句を主題化しているとは限らない。

(88) ˈpʰa? ˈka ˈbo-∅-tə ˈkʰo tsʰo-gə ˈso-zə re?  
 白ぶた-[絶]-[主] 3.[複]-[絶] 育てる-[過]  
 白ぶたは彼らが飼っていました。

## 4 動詞句

### 4.1 動詞の基本構造

Lhagang 方言における動詞は、動詞語幹が単独すなわち動詞連続を形成していない場合、おおそ以下のような構造で現れる。

(方向接辞)-(否定辞/疑間接辞)-動詞語幹-(TAM 標示部分)-(疑間接辞/語気助辞)

このうち、TAM 標示部分は複数の接辞群から成立しており、否定辞がここに現れる場合もある。通常の否定文の場合、否定辞は動詞語幹に先行しないが、2度否定辞が現れることがあり、それは二重否定の意味となる。

<sup>29</sup> 特定の述語用法の場合には重複しない例がある。4.3 参照。

接頭辞が1つで、かつ動詞語幹と直接的につながっている場合、接頭辞と動詞語幹は1つの声調単位になり、接尾辞はそれが否定辞もしくは疑問辞を含まない限り、独立の声調をもたない。

以上の基本構造はすべての動詞についてあてはまるが、動詞語幹は述語動詞と本動詞に分けられる。そのうち述語動詞については、特別な記述が必要とされる。このため、以下 4.2 および 4.3 に分けて記述する。

## 4.2 述語動詞

述語動詞には、判断動詞と存在動詞がある。これらは単独用法のほかに動詞句末接辞として置かれて動詞句を形成する要素にもなる。これらは 4.6.1 で記述する TAM 接辞との共起に制限がある。

### 4.2.1 判断動詞

判断動詞の主な形態は以下のようなものである。

表 11：判断動詞の形態

	平叙文		疑問文	
	肯定	否定	肯定	否定
egophoric	ʼji:	ʼma-ji:	ʼʔə-ji:	ʼma-ji:-la
non-egophoric	ʼreʔ	ʼma-reʔ	ʼʔə-reʔ	ʼma-reʔ-la

判断動詞の語幹は/ʼji:/と/ʼreʔ/の2種類が認められる。これらの使い分けは、前者が発話内容を発話者自ら（1人称）に関連づける（egophoric）ときに用いられ、そうでない（non-egophoric）場合は後者が用いられる<sup>30</sup>。発話者自らに関する発話に関して egophoric と non-egophoric の使い分けが可能である。ただし、条件、譲歩を表す従属節の中においては、egophoric の性質は区別されず、/ʼji:/語幹のみが使用される。

疑問文および各種否定は以上の2つの語幹を含む接辞を伴う形で表されるが、その接辞は上表に示したものが一般的である。

- (89) a ʼŋa-∅ ʼtsʰö mba-∅ ʼji:  
1-[絶] 商人-[絶] [判/E]

私は商人です。

- b ʼŋa-∅ ʼtsʰö mba-∅ ʼreʔ  
1-[絶] 商人-[絶] [判]

私は（誰が見ても分かるように）商人です。

<sup>30</sup> 用語の詳細は Tournadre & LaPolla (2014) を参照。

(90) a 'ŋa-∅ ʔlo sə-∅ 'ma-ji:  
1-[絶] 先生-[絶] [否]-[判/E]  
私は先生ではありません。

b 'ŋa-∅ ʔlo sə-∅ 'ma-re?  
1-[絶] 先生-[絶] [否]-[判]  
私は（誰が見ても分かるように）先生ではありません。

(91) 'tə-∅ ʔpʰaʔ ʰige-∅ 're?  
それ-[絶] ぶた-[絶] [判]  
それはぶたです。

次のような例では、たとえ発話が発話者にかかわっているとしても、/ʔji:/語幹の使用は容認されない。

(92) ʔkʰo-∅ 'ŋa ʔme me-∅ 're?  
3-[絶] 1.[属] 妹-[絶] [判]  
彼女は私の妹です。

2人称が主語であるとき、肯定文では non-egophoric の形式が、疑問文では egophoric の形式が用いられる。これは egophoric の予測的用法 (anticipation usage) と呼ばれる<sup>31</sup>。

(93) ʔtʰoʔ-∅ ʔsʰu-∅ 'ji:  
2-[絶] 誰-[絶] [判/E]  
あなたは誰ですか？

否定疑問の形式に現れる接尾辞/-la/は、おそらく TAM 接辞/-lə/と語気助辞/-fia/の連続/-lə-fia/の縮約に由来するものと考えられる。これは否定疑問にのみ用いられる。この形式は、確認の語気助辞を含んでいるとはいえ、文字通り疑問の意味しか持たない。

(94) ʔtʰoʔ-∅ ʔloʔ ma-∅ 'ma-ji:-la  
2-[絶] 誰-[絶] [否]-[判/E]-[疑]  
あなたは学生ではないのですか？

/ʔji:/にはさらに TAM 接辞類のなかの判断動詞が後続する。/ʔji:-re?/は当然であるという含意がある。一方、egophoricity の表出は明確ではなくなる。

(95) ʔʔə ʰda ʔji:-re?  
このように [判]-[判]  
当然このようです。

/ʔji:-lə ʔʔə-re?/や/ʔji:-lə re?/といった表現も認められる。前者が可能性の低い判断を表明する疑問文であり、それに対して平叙文の形態が呼応する。平叙文単独ではあまり用いられない。

<sup>31</sup> 用語の詳細は Tournadre & LaPolla (2014) を参照。



- (96) a 'ŋo ma ʔə<sup>h</sup>da ʃi:lə ʔə-re?  
 本当に このように [判]-[未/疑]  
 本当にこのようなのですか？
- b 'ŋo ma ʔə<sup>h</sup>da ʃi:lə re?  
 本当に このように [判]-[未]  
 本当にこのようです。
- c 'ŋo ma ʔə<sup>h</sup>da ʃi:lə<sup>h</sup>ma-re?  
 本当に このように [判]-[未/否]  
 本当にこのようではありません。

判断動詞の否定疑問の形式に /-lə ʔə-reʔ/ がつくると反語的用法になり、意味的には強調を伴う肯定となる。

- (97) ʔe<sup>h</sup>oʔ-∅ ʔoʔ ma-∅ ʔma-ʃi:lə-lə ʔə-reʔ  
 2-[絶] 誰-[絶] [否]-[判]-[疑]-[未/疑]  
 あなたは学生ではないのですか？（学生でしょ！）

次の文は、構造上も意味上も存在を表していると考えられるが、動詞には判断動詞が用いられている。

- (98) ʔshō p<sup>h</sup>eʔ-gə ʔlo<sup>h</sup>sɛi-∅ ʔnda: ʔni: pa-nō ʔreʔ-pa  
 来年-[属] 新年-[絶] 2月-[位置] [判]-[証]  
 来年のロサル（新年）は2月中（にある）でしょう。

従属節における用法は次のようなものである。語釈には [判] のみが与えられる。

- (99) ʔshu-∅ ʃi: ʔna ʔe<sup>h</sup>e:lə reʔ  
 誰-[絶] [判] ても 知っている-[未]  
 誰でも知っているでしょう。

#### 4.2.2 存在動詞

存在動詞は、発話内容の情報をどのように手に入れたか (access to information)<sup>32</sup> の異なりに基づいて、以下のように記述できる。

表 12：存在動詞の一覧

	平叙文		疑問文	
	肯定	否定	肯定	否定
直接情報確認	ʔjoʔ	ʔmeʔ	ʔə-ʔjoʔ	ʔmeʔ-lə ʔə-ʃi:
直接情報非確認	ʔji:tu	ʔmeʔ-tu	ʔə-ʃi:tu	ʔmeʔ-lə ʔə-ʃi:
非直接情報	ʔjoʔ-reʔ	ʔjoʔ-lə ʔma-reʔ	ʔjoʔ-lə reʔ	ʔmeʔ-lə ʔə-reʔ

直接情報確認とは、話者が自らの五感を通して直接得た情報で、これに基づく発話は基本的に egophoric である。直接情報非確認とは、話者が持っている知識や常識で判断した情報

<sup>32</sup> 用語の詳細は Tournadre & LaPolla (2014) を参照。

で、それを話者が自らの五感を通して直接得たことを表す。これに基づく発話もまた基本的に egophoric である。非直接情報とは、話者がもっている知識や常識で判断した情報であるが、話者が自らの五感を通して直接得たのではなく、一般的知識や伝聞から間接的に得た情報であることが通常である。客観的事実確認としても用いられる。これは egophoric である場合もあれば non-egophoric である場合もある。

直接情報確認を示す語幹には肯定形式と否定形式の2種がある。直接情報非確認の肯定には独立の語幹形式が認められるが、単独では用いられない。単音節語幹を除き、上表のように形態素分析が可能であるものの、以上の形式はひとかたまりに扱い、語釈においてはすべて [存] ~[存/否]~[存/疑] で統一して扱う<sup>33</sup>。

存在動詞は意味的に「所有」、「存在」、「位置」の3点を表す<sup>34</sup>が、Lhagang 方言ではこれらをすべて表12の形態で表し、これらの意味的差異は統語上の格標示によって示される。

「所有」は所有者が与格、所有物が絶対格で標示される。

- (100) ʔtʰoʔ-la ʔkʰø mba-∅ ʔə-joʔ  
2-[与] 暇-[絶] [疑]-[存]  
あなたは暇がありますか？

「存在」は存在物が絶対格で標示される。

- (101) ʔpʰa ma-də ʔiŋe mo-də ʔpu zi-∅ ʔjoʔ  
両親-[共] 妻-[共] 息子-[絶] [存]  
(私には) 両親と妻と息子がいます。

- (102) ʔshɔ: ni ʔkʰø mba-∅ ʔjoʔ  
明日 暇-[絶] [存]  
明日暇があります。

- (103) ʔtʰə-∅ ʔmeʔ  
何-[絶] [存/否]  
何でもありません。/何でもありません。

「位置」は位置情報が与格または場所を表す名詞で示され、存在物が絶対格で表示される。位置情報はしばしば文頭に来る。

- (104) ʔto dzə-ŋgo ʔkʰuʔ ma-∅ ʔjoʔ  
テーブル-[位置] かばん-[絶] [存]  
テーブルの上にかばんがあります。

直接情報確認 (105a) と直接情報非確認 (105b) の用法は次のように対比できる。

<sup>33</sup> この方法は Tournadre & Suzuki (forthcoming) で採用されている方法である。形態論的には分析的に記述できるように見えるが、意味的にはひとかたまりとして理解するほうが現実的であり、母語話者の直感とも合うためである。また、4.6.4 で扱う epistemic modality の記述においては、分析的な記述はほぼ通用しない。近似の方法は Zeisler (2004) でも採用されている。末尾に付録として、分析的語釈の例と意味的語釈の例の対照を掲げておく。

<sup>34</sup> 黄成龍 (2013) を参照。

(105) a ʔa p<sup>h</sup>a-∅ ʰn̄-*la* ʔə-*jo?*  
 父-[絶] 家-[位] [存/疑]  
 父は家の中にいますか? (父と一緒にいるか?)

b ʔa p<sup>h</sup>a-∅ ʰn̄-*la* ʔə-*ji:-tu*  
 父-[絶] 家-[位] [存/疑]  
 父は家の中にいますか? (父がいるのをちょっと前に見たか?)

非直接情報による存在動詞の疑問形は、4.6.1 に述べる TAM 接辞群と共通の形式を見せるが、機能が全く異なっている。

(106) ʰn̄də ʰn̄-*la* ʰn̄ ʰd̄qu ʔpa: s<sup>h</sup>a-∅ ʰjoʔ-lə ʔə-*re?*  
 この 中-[位] 空港-[絶] [存/疑]  
 ここに空港はありますか?

ただし、以上の形式に否定辞がついたものは単なる否定の意味しか持たない。

(107) ʰt̄ɑʔ mo ʰjoʔ-lə ʰma-*re?*  
 とても [存/否]  
 (人が) とても (たくさん) いるのではありません。

存在動詞の否定は次のようになる。

(108) a ʰta ʰge ʰsū-∅ ʰmə ts<sup>h</sup>εʔ ʰme?  
 馬 3-[絶] しか [否/存]  
 馬は3頭しかいません。(今頭数を数えて知った)

b ʰta ʰge ʰsū-∅ ʰmə ts<sup>h</sup>εʔ ʰmeʔ-tu  
 馬 3-[絶] しか [否/存]  
 馬は3頭しかいません。(3頭しかいないことを知って答える)

(109) ʔa wo-gə ʰk<sup>h</sup>ɔ̄ m̄ba ʰn̄i m̄ba-∅-tə ʰjoʔ-lə ʰma-*re?*  
 祖父-[属] 家 古い-[絶]-[主] [否/存]  
 祖父の古い家といえば、ありません。

存在動詞の否定は必ずしも肯定形の否定の意味とならず、話者のよく知っている事柄には /ʰjoʔ ʰma-*re?*/ が、今知った事柄については /ʰmeʔ-tu/ が用いられる。

(110) a ʰlā-∅ ʰjoʔ ʰma-*re?*  
 道-[絶] [否/存]  
 道は (そもそも) ありません。

b ʰlā-∅ ʰmeʔ-tu  
 道-[絶] [否/存]  
 道は (以前はありましたが今はなくなって) ありません。

存在動詞が否定の意味を持つときは TAM 接辞群が付き、以下のような表現が認められる。

- (111) a 'lā-∅ ^meʔ-k<sup>h</sup>e:  
道 [否/存]-[完]  
道は(今知ったことに)なくなってしまいました。
- b 'lā-∅ 'joʔ-zə 'ma-ji:-k<sup>h</sup>e:  
道 [存]-[過/否]-[完]  
道は(そもそも)あったのではありません。

### 4.3 本動詞

動詞の形態としては、次のようなものが代表的である。

1. 1音節語幹  
'mboʔ「呼ぶ」、-t<sup>h</sup>iʔ「導く」、<sup>h</sup>ga「愛する」
2. 2音節語<sup>35</sup>  
-ha 'ko「理解する」、'ŋo ɕ<sup>h</sup>e:「知り合う」、-<sup>h</sup>na h<sup>h</sup>tɕe「誓う」
3. 名詞(音節数を問わない) + 補助動詞 (/<sup>h</sup>dzoʔ/や/tɕeʔ/)「する」  
-ts<sup>h</sup>a pa <sup>h</sup>dzoʔ「熱がある」、-<sup>h</sup>tɕi mba <sup>h</sup>dzoʔ「賠償する」 -po 'tɕeʔ「口づけする」

本動詞の語幹自体は無変化であるが、命令形と非命令形で語幹が異なる動詞があり、表13の2例である。

表 13：動詞語幹の交替

語義	非命令形	命令形
行く	' <sup>h</sup> dɔ	-s <sup>h</sup> ō / -s <sup>h</sup> o:
来る	'fiō / 'fio:	'ɕ <sup>h</sup> oʔ

また、動詞の要求する項の数とその格標示の観点から、次のような分類が可能である。

1. 1項動詞 (S：絶対格)  
'<sup>h</sup>dɔ「歩く」、'ŋu「泣く」、'na「病気だ」
2. 2項動詞 (A：能格か絶対格、P：絶対格)  
-za「食べる」、-<sup>h</sup>seʔ「殺す」
3. 2項動詞 (A：能格か絶対格、P：与格か絶対格)  
'riʔ「会う」
4. 2項動詞 (A：絶対格、P：共格)  
'<sup>h</sup>da <sup>h</sup>da「似ている」
5. 2項動詞 (A：絶対格、P：与格)  
<sup>h</sup>ga「愛する」
6. 2項動詞 (R：与格、S：絶対格)

<sup>35</sup> 2音節で1語を形成するものと、1音節ごとに独立した語からなるが切り離せないものの2タイプがある。

<sup>h</sup>taʔ「怖がる」、<sup>h</sup>taʔ「～という名前である」

7. 3項動詞 (A: 能格か絶対格、P: 絶対格、R: 与格)

<sup>h</sup>te:「手渡す」、<sup>h</sup>ja:「貸す<sup>36</sup>」、<sup>h</sup>zi:「与える」

以上の分類において、「項」とはいうが、文意が明快であれば統語的に現れる必要はなく、省略するのが通例である。また、動詞の形態で「名詞+動詞」の組み合わせを取るもので、かつ全体で1つの意味を構成する場合は、この名詞は上の分類にいう「項」に数えない。

本動詞のみで完結する文は、動作動詞の場合「命令」「勧誘」などの意味を表す平叙文か命令文の形になる<sup>37</sup>。

(112)    <sup>h</sup>te<sup>h</sup>oʔ-∅    'rō        <sup>h</sup>sā<sup>h</sup>lo<sup>h</sup>tō  
2-[絶]        自分で    考える  
あなたは自分で考えなさい。

(113)    'ŋa: ŋō-∅    'ma-<sup>h</sup>dō  
子供-[絶]    [否]-叩く  
子供を叩くな。

状態を表す動詞については、たいてい現在の状態を意味する。

(114)    'ŋa-∅    <sup>h</sup>te<sup>h</sup>oʔ-la    <sup>h</sup>ga  
1-[絶]    2-[与]        愛する  
私はあなたが好きです。

また、未来のことを示す場合にも動詞語幹で終止する文がある。

(115)    <sup>h</sup>te<sup>h</sup>oʔ-∅    <sup>h</sup>sa: ŋī    'ʔa-<sup>h</sup>do  
2-[絶]        明日        [疑]-行く  
あなたは明日出かけますか？

#### 4.4 形容詞：述語用法として

ここでは、動詞と共通する接辞をとって述語になる場合の形容詞について述べる。また、4.5, 4.6における各接辞の記述では、動詞と並んで形容詞の例も区別せずまとめて掲げる。

形容詞の形態は修飾用法の場合と変わらない。このとき、述部を形成するときは通常判断動詞が必要とされる。形容詞は補語の位置にあるとも分析できる。

(116)    <sup>h</sup>da    <sup>h</sup>sa<sup>h</sup>te<sup>h</sup>a-∅    'ŋo ma    <sup>h</sup>teiʔ po    'reʔ  
この    地方-[絶]    本当に    快適な        [判]  
この地方は本当に快適です。

しばしば形容詞に/<sup>h</sup>teiʔ/「1」が後続して述部を形成する。以下の例文を見ると分かるように、代名詞は形容詞の修飾を受けないため、形容詞は述部の一部にあると考える。

<sup>36</sup> この動詞語幹は同時に「借りる」も意味するが、その場合は2項動詞である。

<sup>37</sup> 文のタイプについては5節の記述を参照。

- (117) ʔtʰoʔ-∅ ʔzō mbo ʰtʰaʔ mo ʔtʰiʔ ʔreʔ  
 2-[絶] 優しい とても 一 [判]  
 あなたはとても優しいです。

ただし、接辞類が付加されるとき、重複するタイプの語幹は非重複形となり、/pa, po, ma, mo/などの接尾辞が脱落するのが通例である。

- (118) ʔmə-ʰtʰeʰaʔ-tu  
 [否]-寒い-[証]  
 (私は) 寒くありません。

また、本動詞と同様に何も付加されずに名詞句として用いられるが、格標識を付加する場合は名詞化接辞/tə/が必要とされる。

形容詞述語が比較を表す場合、接辞類が付加されてもされなくても、重複するタイプの語幹は非重複形となり、/pwə, mwə/などの接尾辞が脱落するのが通例である。

- (119) ʔkʰo-∅ ʔŋa-tʰoʔ-la ʔlo ʰsū ʔtʰe-reʔ  
 3-[絶] 1-[位置]-[位] 年 3 大きい-[判]  
 彼は私より3歳年上です。

形容詞述語が「最も～」を表す場合、形容詞語幹に/ʔtʰuʔ-tə/を後続させるか、文脈から分かる場合は形容詞に/-tə/のみを付加する形式を取る。

- (120) ʔndə-∅ ʔtʰe-ʔtʰuʔ-tə ʔreʔ  
 これ-[絶] 大きい-最も-それ [判]  
 これが最も大きいです。

- (121) ʔkʰo tsʰo ʔnō-la ʰtʰa ʔtʰi-∅ ʔlo ʔtʰə bo-tə ʔreʔ  
 3.[複] 中-[位] [人名]-[絶] 年を取っている-それ [判]  
 彼らの中でタシが最も年を取っています。

ほかにも、独立の副詞を用いて「最も～」を表すこともできる。

- (122) ʔtʰeʰoʔ-∅ ʔtʰə-∅ ʔno-ʰgo-ʰsā ʔna ʰnō ʰtʰiʔ ʔtʰə bo-tə ʔno  
 2-[絶] 何-[絶] 買う-[必要]-思う ならば 最も 大きい-それ 買う  
 もしあなたが何か買いたいのであれば、最も大きいものを買いなさい。

## 4.5 接頭辞類

### 4.5.1 方向接辞

方向接辞と考えられる要素には、次の4種類がある。

1. 上方：ʔja:-
2. 下方：ʔma:-
3. 向心：ʔtsʰə-
4. 離心：ʔpʰa-

これらは方向接辞と呼んでいるが、文法的機能はほとんどない。特に「向心」「離心」は個別の動詞語幹に添えられ、特別に強い意味を担わない化石化した要素となっている。方向を表す必要がある場合は、方向接辞ではなく、方向を表す2音節形式の語、たとえば /'ja la/ 「上へ」、/ma la/ 「下へ」などを動詞語幹の前に置く。これは動詞語幹とは異なる声調領域に置かれ、接辞ではなく副詞と呼べる。

方向接辞を伴う例としては、次のようなものがある。

- (123) a 'ja:<sup>h</sup>tʃe  
[方]-生まれる  
(植物が) 成長する。
- b 'ma:<sup>h</sup>ŋɑ?  
[方]-押さえる  
押さえつける。
- c `ts<sup>h</sup>ə-ɕ<sup>h</sup>o:  
[方]-来る.[命]  
こちらに来なさい。
- d `p<sup>h</sup>a-<sup>h</sup>la  
[方]-教える  
教える。
- (124) ^ja: la ^ma:<sup>n</sup>du?  
上へ [方]-座る  
上(上座)のほうへ座ってください。
- (125) 'ŋa-∅ 'fio<sup>h</sup>tʃi? ^rə-<sup>n</sup>go 'ma:<sup>h</sup>lɔ-nə ʔa<sup>h</sup>do `ɕ<sup>h</sup>ə-t<sup>h</sup>e:  
1-[絶] 1度 山-[位置] [方]-落ちる-[名] もう少しで 死ぬ-[完]  
私は1度山で下に落ちて、死にかけました。

#### 4.5.2 否定辞

否定辞には、以下の2種がある。

1. 未完了否定: 'mə-
2. 完了否定: 'ma-

未完了否定と完了否定の異なりは次のようである。

- (126) a 'ŋa-∅ 'mə-ti  
1-[絶] [否]-書く  
私は書きません。
- b 'ŋa-∅ 'ma-ti  
1-[絶] [否]-書く  
私は書きませんでした。/私が書いたのではありません。

否定辞は、それが動詞句のどこに配されようとも、必ず声調を担う。

複音節動詞の例は次のようになる<sup>38</sup>。

- (127)    ʼŋa-∅    ʼŋo ʰmə-ɕʰe:  
           1-[絶] 知り合いである [否]-[語幹]  
           私は（彼を）知ってはいないです。

完了否定は禁止命令<sup>39</sup>にも用いられる。

- (128)    ʰma-sʰo:  
           [否]-行く.[命]  
           行くな。
- (129)    ʰtsʰiʔ kʰa ʰma-za  
           怒る [否]-[語幹]  
           怒らないで（ください）。/ごめんなさい。

#### 4.5.3 疑間接辞

疑間接辞は疑問文を形成するときに用いられるほか、推量や推測を述べるときにも現れる。

疑問文を形成する接辞は接頭辞と接尾辞がある。ただし両者は共起しない。

ここでは接頭辞について述べる。疑間接頭辞には/ʔə-/が認められる。疑間接頭辞は動詞語幹に否定辞がつかない場合に限って現れる。動詞が TAM 接辞を伴う場合、疑間接頭辞は動詞語幹ではなく TAM 接辞の直前に現れうる。

- (130)    ʰtɕʰoʔ-∅    ʰkʰo-la    ʰʔə-ʰga  
           2-[絶]    3-[与]    [疑]-愛する  
           あなたは彼が好きですか？
- (131)    ʰtɕʰoʔ-∅    ʰkʰɛ: ʰʔə-le:  
           2-[絶]    [疑]-賛成する  
           あなたは賛成しますか？

選択疑問文の場合は最後の選択肢を除くものに疑間接辞がつき、最後の選択肢は平叙文と同様の形式をとる。

- (132)    ʰtɕʰoʔ-∅    ʰŋɕɛ:-∅    ʰza-lə ʰʔə-ji:    ʰtə    ʰtsā mba-∅    ʰza-li:  
           2-[絶]    米-[絶]    食べる-[未/疑]    または    ツアンパ-[絶]    食べる-[未]  
           あなたはごはんを食べますか、それともツアンパを食べますか？

疑間接頭辞 ʔə- と同一形態であるが、疑問を表さず自問を表す事例も認められる。

<sup>38</sup> 動詞/ʰŋo ɕʰe:/「知り合いである」のような形態素分析のできない複音節からなる動詞は、その接辞類を最終音節に付加する。

<sup>39</sup> 特定の動詞を除いて命令形とそれ以外の動詞語幹の形態が同一であるため、完了否定か禁止命令かは文脈によって決まる。



- (133) ʔᵛa-n̄d̄ə-∅    -ᵛta    -na    ʔzĩ m̄bo-ʔᵛd̄a joʔ sᵛa reʔ    ʔə-zĩ-na  
 肉-この-[絶] 見る と おいしい-[可]                      [疑]-おいしい-[調]  
 この肉を見るとおいしそうですが、おいしいかな？

## 4.6 接尾辞類

### 4.6.1 TAM を表す接辞群

動詞語幹の後部には TAM を表す接辞群がつく。この接辞群はほとんどの場合形態論的に分析することが可能であるが、実際の用法においては、複数の要素の組み合わせで1つの意味を表現する。しかし、まずは形態論的に細かく分析し、各形態素に分解して示す。続いて具体例を掲げる際には、表現する意味カテゴリーに分類してそれぞれ記述する<sup>40</sup>。

### 構成する形態素の配列

4.1 で示した動詞の基本構造の中における「TAM 標示部分」に含まれる接辞群の配列をモデル化すると、次のようになる。

#### (TA 接辞-1)-(TA 接辞-2)-(AM 接辞)-(述語動詞由来接辞)-(M 接辞)

M 接辞は語気を表す助辞もしくは諾否疑問用の疑問接辞と同じ位置を占める。また、可能性・推測を表す表現を構成する要素も述語動詞由来接辞に後続しうる<sup>41</sup>。

それぞれに入る接辞類の形態の一覧は次のようである。

1. TA 接辞-1  
-zə, -ᵻdzu, -lə, -ɕə
2. TA 接辞-2  
-ᵻgo, -tᵻe:, -kᵻe:
3. AM 接辞  
-li:
4. 述語動詞由来接辞  
-ji:, -mĩ, -reʔ, -joʔ, -meʔ
5. M 接辞  
-tu, -pa

TAM 接辞を5種類に分けたのは、配列のみが問題になるのではなく、次のような異なりが認められることによる。

<sup>40</sup> 本節の記述は Suzuki & Sonam Wangmo (2015c) の発表およびそれに対するコメントに基づいて改訂増補した。

<sup>41</sup> これを「述語動詞由来接辞に後続しうる」と分析するか、述語動詞由来接辞を含む一連の音形をひとかたまりととらえるかは考察の余地がある。本稿の記述では、これを分析することなくひとかたまりとして扱う。4.6.4 参照。

- TA 接辞-1 は名詞化標識としても機能することがある (3.5 参照)。通常述語動詞が付加される。また、動詞句の否定、疑問を表す接頭辞をその直前にとることができないものでもある。
- TA 接辞-2 は述語動詞を必ずしも必要とせずかつ動詞句の接頭辞をその直前にとることができるものである。ただしこれらの形態素が単独で用いられることはほとんどない。ここに含まれる接辞群は、1つの動詞句に並列して用いることができる。ふるまいとしては、動詞連続と共通する点が多い。これらの形態の多くはもともと独立した動詞であったが、のちに文法化し固定化したものであると考えられる。
- AM 接辞は基本的に述語動詞をとらずかつ動詞句の接頭辞をその直前にとることができないものである。語形成としては、「TA 接辞-1 + 述語動詞」の縮約形である。
- 述語動詞由来接辞は、単独で用いられる述語動詞 (4.2.1 参照) と同一の形態であるが、意味するところが異なっている。単独ではその意味機能を記述できないため、他の接辞とまとめて記述する必要がある。
- M 接辞は証拠性を反映する接辞であり、本動詞、述語動詞、その他の TAM 接辞に後続が可能である。一般に動詞句の最も後ろを占める。

ただし動詞句は以上のいずれの接辞を伴わなくても文を終止することができる。

述語動詞・本動詞・形容詞に共通して付加できるものと、どれかに限定されるものに分かれる。

動詞句を否定する場合は否定辞（接頭辞）が本動詞につく場合と、動詞句末接辞に否定形を用いる場合がある。疑問文の場合は疑問接頭辞が TAM を表す接辞につくことがある。TAM 接辞にこれらの接頭辞を付加する場合は本動詞と異なる独立の声調領域を形成する。述語動詞の否定形と同じ形式が単独で用いられる場合も同様である。

## TAM の総合的記述

時制とアスペクトの観点から見ると、Lhagang 方言では、未完了未実現、現在/継続、現在進行、アオリスト、現在完了が区別される。まず、この分類に従って記述を行う。そのうち、M 接辞について独立に記述する<sup>42</sup>。

## 未完了

未完了とは一般的に未来と呼ばれるカテゴリーに非常に近い。行為の実現がなされていない状況のほか、行為は開始しているが達成がなされていない状況を表す。過去のことを言及することはできない。平叙文肯定形式の場合、次のような形式が認められる。

---

<sup>42</sup> ここで採用する分析方法は、Suzuki & Sonam Wangmo (2015a)、鈴木ほか (2015ab) で採用されている分析方法とは異なっている。

表 14：未完了平叙文肯定形式の接辞一覧

形態	意味	語積
-lə ji:	未完了/egophoric	[未/E]
-lə re?	未完了/non-egophoric	[未]
-li:	意思未来/egophoric	[意]
- <sup>h</sup> dzɯ re?	可能未来/non-egophoric	[未]
-go / - <sup>h</sup> go	必要未来/egophoric	[必/E]
-go re? / - <sup>h</sup> go re?	必要未来/non-egophoric	[必]

以上の形態について、平叙文否定、疑問文肯定、疑問文否定の形態は以下のようなになる。

表 15：未完了接辞の肯定/否定、平叙/疑問の形態

平叙文		疑問文	
肯定	否定	肯定	否定
-lə ji:	-lə ʼma-ji:	-lə ʼʔə-ji:	-lə ʼma-ji:-la
-lə re?	-lə ʼma-re?	-lə ʼʔə-re?	-lə ʼma-re?-la
-li:			
- <sup>h</sup> dzɯ re?	- <sup>h</sup> dzɯ ʼma-re?	- <sup>h</sup> dzɯ ʼʔə-re?	- <sup>h</sup> dzɯ ʼma-re?-pa
-go / - <sup>h</sup> go	ʼmə-go		
-go re? / - <sup>h</sup> go re?	-go ʼma-re?		

空白になっている個所は日常的に用いられないものである。

- (134) a ʼŋa-∅ ʼ<sup>n</sup>do-lə ji:  
 1-[絶] 行く-[未/E]  
 私は行くでしょう。
- b ʼŋa-∅ ʼ<sup>n</sup>do-li:  
 1-[絶] 行く-[意]  
 私は行きますね。
- c ʼŋa-∅ ʼ<sup>n</sup>do-go  
 1-[絶] 行く-[必/E]  
 私は行かないといけません。(もう行く時間だ)

- (135) a ʔkʰo-∅ ʔŋdo-lə re?  
 3-[絶] 行く-[未]  
 彼は行くでしょう。
- b ʔkʰo-∅ ʔŋdo-<sup>h</sup>dzɯ re?  
 3-[絶] 行く-[未]  
 彼はたぶん行くでしょう。
- c ʔkʰo-∅ ʔŋdo-go re?  
 3-[絶] 行く-[必]  
 彼は行かないといけません。(もう行く時間だ)
- (136) ʔtʰoʔ-∅ ʔta ri ʔŋdo-li: ʔtə ʔsʰɔ̃ ni: ʔŋdo-li:  
 2-[絶] 今日 行く-[意] または 明日 行く-[意]  
 あなたは今日行くつもりですか、それとも明日行くつもりですか？
- (137) ʔsʰɔ̃ ni ʔka na ʔŋdo-<sup>h</sup>go ʔh̄sā-ɕɔ:  
 明日 どこへ 行く-[必] 思う-[進]  
 (あなたは) 明日どこへ行きたいと思っていますか？
- (138) ʔko ze-∅ ʔd̄<sup>m</sup>bo ʔtʰo-<sup>h</sup>go re?  
 衣服-[絶] 暖かく 着る-[必]  
 衣服は暖かく着る必要があります。
- (139) ʔtʰoʔ-gə ʔle:-<sup>h</sup>dzɯ-gə ʔza ma-∅ ʔŋa-∅ ʔza-<sup>h</sup>go-tu  
 2.[能] 作る-[未]-[属] ごはん-[絶] 1-[絶] 食べる-[必]-[証]  
 あなたが作ってくれるごはんを私が食べましょう。

/-go/-/<sup>h</sup>go/を平叙文で2人称の行為者とともに用いる場合、語用論的には「絶対に～しなさいよ」といった命令の意味を帯びる。丁寧に語釈を与えれば、この/-go/-/<sup>h</sup>go/は義務の意味になるだろう。しかしながら、構造上は命令文になっているわけではない<sup>43</sup>。

- (140) ʔtʰoʔ-∅ ʔŋio:-<sup>h</sup>go  
 2-[絶] 来る-[必]  
 あなたは絶対来なさいよ。

/-lə ʔʔə-reʔ/-/lə reʔ/<sup>44</sup> は TA とは関係なく疑問の意味を表す場合がある。

<sup>43</sup> 命令文の構造については、5.2.3 を参照。

<sup>44</sup> 規則的な組み合わせは/-lə ʔʔə-reʔ/となるだろうが、実際の運用においては/-lə reʔ/のように疑問接辞を含まない形式で現れる。前者は実際の例によって支持されない。

- (141) a 'za-ŋɛ:lə ʔə-re?  
 食べる-よい-[未]  
 (これは) 食べられますか?  
 b 'za-ŋɛ:lə-re?  
 食べる-[判]  
 (これは) 食べられます。

なお、発話において未来のことに言及しているのが文脈から明らかな場合、以上の接辞が現れなくても文は成立する。

### 継続

現在の状態が継続している状況を表すのは、述語動詞の存在動詞である。肯定形式の場合、次のような形式が認められる。

表 16：継続平叙文肯定形式の接辞一覧

形態	意味	語釈
-joʔ	現在/継続/egophoric	[継/E]
-joʔ reʔ	現在/継続/non-egophoric	[継]

以上の形態について、平叙文否定、疑問文肯定、疑問文否定の形態は以下ようになる。

表 17：継続接辞の肯定/否定、平叙/疑問の形態

平叙文		疑問文	
肯定	否定	肯定	否定
-joʔ	-meʔ	-joʔ-lə ʔə-ji:	-meʔ-li:
-joʔ reʔ	-joʔ ʔma-reʔ	-joʔ-lə ʔə-reʔ	

空白になっている個所は日常的に用いられないものである。

- (142) ʔŋa-∅ ʔa na ʔnduʔ-joʔ  
 1-[絶] ここ 泊まる-[継/E]  
 私はここに泊まっています。  
 (143) ʔkʰo-∅ ʔa na ʔnduʔ-joʔ reʔ  
 3-[絶] ここ 泊まる-[継]  
 彼はここに泊まっています。

### 習慣/判断

動詞語幹に直接判断動詞が後続する場合がある。この場合の表現する TA 解釈は文脈によるが、基本的に現在および習慣性の行為について言及していることが多い。肯定形式の場合、次のような形式が認められる。

表 18：習慣/判断平叙文肯定形式の接辞一覧

形態	意味	語積
-ji:	判断/egophoric	[判/E]
-re?	判断/non-egophoric	[判]

以上の形態について、平叙文否定、疑問文肯定、疑問文否定の形態は以下ようになる。

表 19：習慣/判断接辞の肯定/否定、平叙/疑問の形態

平叙文		疑問文	
肯定	否定	肯定	否定
-ji:	ˈma-jɪ:	-lə ʔə-jɪ:	
-re?	ˆma-re?	-lə ʔə-re?	

空白になっている個所は日常的に用いられないものである。

(144) ˈza-nɛ:-re?

食べる-よい-[判]

(これは) 食べられます。

(145) ˈkʰo tsʰo-∅ ˈtʰã hʰtɕe? ˈndzo mo-∅ ˈhso-re?

3.[複]-[絶] みんな 乳牛-[絶] 飼う-[判]

彼らはみんな乳牛を飼います/飼っているものです/飼うつもりです。

習慣について言及する場合、egophoric 形式が用いられることは少ない。

(146) ˈŋa-∅ ˈkʰɛ: ma-∅ ˈhso-re?

1-[絶] 牛-[絶] 飼う-[判]

私は牛を飼います/飼っているものです/飼うつもりです。

(147) ˈfiŋgō mo ˈŋa tse ˈhʰtɕe? me? ˈni:-lə ʔə-re?

夜 早い 少し 眠る-[判/疑]

(あなたは) 夜早い目に寝る (習慣をもっている) のですか？

判断を伴う形式で疑問文を作る場合、/-lə re?/となることもある。

(148) ˈza ma-∅ ˈlɛ: ˈhka? ˈmbu ˈdʒu-∅ ˈhsa:-lə re?

ごはん-[絶] 作る 時 薪-[絶] 燃やす-[判/疑]

ごはんを作るとき薪を燃やしますか？

判断の接辞がつく場合の疑問文に対する答えにおいて、egophoric 形の否定は次のように分析的なものにもなる。

(149) a ˈndə-∅ ˈza-ˈkʰɛ-∅ ˈtɕʰoʔ-∅ ʔə-jɪ:

これ-[絶] 食べる-[名]-[絶] 2-[絶] [疑]-[判/E]

これを食べたのはあなたですか？

b ˈŋa-∅ ˆma-jɪ: ˈfiʝō hʰtɕəʔ-∅ ˆreʔ-pa

1-[絶] [否]-[判/E] [人名]-[絶] [判]-[証]

私 (が食べたの) ではありません。ヨンチェ (が食べたの) でしょう。

判断と継続は次のような対比ができる。

- (150) a ʔkʰo-∅ ʔhʰtsa tʰoʔ ʔnduʔ-reʔ  
 3-[絶] 上の階 泊まる-[判]  
 彼は上の階に泊まっています。(一般に彼にはそういう傾向がある)
- b ʔkʰo-∅ ʔhʰtsa tʰoʔ ʔnduʔ-joʔ reʔ  
 3-[絶] 上の階 泊まる-[継]  
 彼は上の階に泊まっています。(彼の存在を間接的に聞いたことを述べる)

以上の (150b) の発話を受けて、次のように 1 人称主語に non-egophoric を用いて客観性を強調する表現が可能となる。

- (151) ʔŋa-∅ ʔhʰtsa zɑʔ ʔnduʔ-joʔ reʔ  
 1-[絶] 下の階 泊まる-[継]  
 私は (たとえば)、下の階に泊まっています。

### 進行

動作が進行しているもしくはしていた状況を表す接辞が存在する。これらはこれから進行することを想定した発話には用いられないため、非未来の事柄を表すときに用いられるといえる。肯定形式の場合、次のような形式が認められる。

表 20：進行平叙文肯定形式の接辞一覧

形態	意味	語釈
-ɕə joʔ / -ɕə:	非未来/進行/egophoric	[進/E]
-ɕə joʔ reʔ / -ɕə: reʔ	非未来/進行/non-egophoric	[進]
-ɕə ji:tu / -ɕi: tu	非未来/進行/non-egophoric	[進]

以上の形態について、平叙文否定、疑問文肯定、疑問文否定の形態は以下ようになる。

表 21：進行接辞の肯定/否定、平叙/疑問の形態

平叙文		疑問文	
肯定	否定	肯定	否定
-ɕə joʔ / -ɕə:		-ɕə joʔ-lə ʔə-ji:	
-ɕə joʔ reʔ / -ɕə: reʔ		-ɕə joʔ-lə ʔə-reʔ	
-ɕə ji:tu / -ɕi: tu			

空白になっている個所は日常的に用いられないものである。否定の表現が認められないのは注目に値する。

現在の進行の例としては、以下のようなものがある。

- (152) a ʔtʰoʔ-∅ ʔtʰə-∅ ʰi zo-çə joʔ  
 2-[絶] 何-[絶] する-[進/E]  
 あなたは何をしているのですか？
- b ʔkʰo-∅ ʔtʰə-∅ ʰi zo-çə: reʔ  
 3-[絶] 何-[絶] する-[進]  
 彼は何をしているのですか？

- (153) ʔtə tsʰo-gə ʔtʰə tə-∅ ʰi zo-çi: tu  
 あの人たち-[能] 何-[絶] する-[進]  
 あの人たちは何をしていますのでしょうか？

過去の進行の例には、通常時間を表す要素が含まれる。たとえば以下のようなものである。

- (154) ʔkʰo tsʰo-gə ʔta tçiʔ ʔtʰə tə-∅ ʰi zo-çi: tu  
 3.[複]-[能] さっき 何-[絶] する-[進]  
 彼らはさっき何をしていたのでしょうか？

### アオリスト

アオリストとは、一般的に過去と呼ばれるカテゴリーに非常に近く、実際 Lhagang 方言の TAM 体系の中では「過去」と呼んでも差し支えない<sup>45</sup>。この形式での発話の意味は、過去に起こった事項についての言及であり、現在の状況と何の関連づけも意図されていない。また、動作が発話内容の時間軸の中で終了したことを示している<sup>46</sup>。肯定形式の場合、次のような形式が認められる。

表 22：アオリスト平叙文肯定形式の接辞一覧

形態	意味	語釈
-zə ji:	アオリスト/egophoric	[過/E]
-zə reʔ	アオリスト/non-egophoric	[過]
-zə	アオリスト	[過]

以上の形態について、平叙文否定、疑問文肯定、疑問文否定の形態は以下のようなになる。

表 23：アオリスト接辞の肯定/否定、平叙/疑問の形態<sup>47</sup>

平叙文		疑問文	
肯定	否定	肯定	否定
-zə ji:	-zə ʔma-ji:	-zə ʔə-ji:	ʔma-V-zə-ji:
-zə reʔ	-zə ʔma-reʔ	-zə ʔə-reʔ	ʔma-V-zə ʔə-reʔ
-zə	ʔma-V-zə		

<sup>45</sup> しかし一方で時制 (tense) の体系における「過去」とは異なるため、記述の上ではアオリストと呼んでおく。

<sup>46</sup> フランス語の単純過去の用法に非常に近い。また、行為の終結が含意されている点は、次に述べる現在完了と共通するところがある。

<sup>47</sup> 表中の V は動詞語幹を表す。



空白になっている個所は日常的に用いられないものである。

- (155) 'lo 'mā<sup>m</sup>bo-la 'ma-ri:-zə<sup>j</sup>i:  
 年 多い-[位] [否]-会う-[過/E]  
 (私はあなたと) 長年会っていませんでした。

- (156) ˀtɕ<sup>h</sup>oʔ-∅ ˀtō daʔ-∅ ˀfiqə-ts<sup>h</sup>a:-zə ˀʔə<sup>j</sup>i:  
 2-[絶] 用事-[与] する-完成する-[過/疑/E]  
 あなたは用事をし終えましたか？

判断動詞を伴わない形式は、egophoricity について言及されないため、どのような発話にでも用いられる。

- (157) a 'ŋa-∅ ˀʔa<sup>h</sup>to: ˀfiqə-ts<sup>h</sup>a:-zə  
 1-[絶] ほとんど する-完成する-[過]  
 私は (用事を) ほとんどし終えました。  
 b ˀk<sup>h</sup>o-∅ ˀʔa<sup>h</sup>to: ˀfiqə-ts<sup>h</sup>a:-zə  
 3-[絶] ほとんど する-完成する-[過]  
 彼は (用事を) ほとんどし終えました。

口承物語で叙述される過去の事柄は基本的に /-zə reʔ/ が用いられる。

- (158) ˀtə<sup>h</sup>da ˀze:-zə reʔ-sə reʔ  
 そのように 言う-[過]-[伝]  
 そのように言ったそうです。(『菩薩の愛する地・塔公』)

疑問文における egophoric の予測的使用は、この接辞の場合にも適用される。

- (159) ˀtɕ<sup>h</sup>oʔ-∅ ˀka na-nə ˀfið-zə<sup>j</sup>i:  
 2-[絶] どこ-[奪] 来る-[過/E]  
 あなたはどこから来ましたか？

### 現在完了

現在完了での発話の意味は、過去に起こったことと現在の状況と何らかの関連があることを意識した発話となり、発話に現れる行為が直接体験か否か、すなわち発話内容が五感によって認識したことに基づいているかそれともすでにある知識や常識に基づく判断が働くことによつて間接的に情報を認識したかという異なりにおいて形式を異にする。肯定形式の場合、次のような形式が認められる。

表 24：現在完了叙文肯定形式の接辞一覧

形態	意味	語積
-t <sup>h</sup> e:	現在完了/直接体験	[完]
-k <sup>h</sup> e:	現在完了/非直接体験	[完]

以上の形態について、平叙文否定、疑問文肯定、疑問文否定の形態は以下ようになる。

表 25：現在完了接辞の肯定/否定、平叙/疑問の形態<sup>48</sup>

平叙文		疑問文	
肯定	否定	肯定	否定
-t <sup>h</sup> e:	ʼma-V-t <sup>h</sup> e:	ʼʔə-V-t <sup>h</sup> e:	ʼma-V-t <sup>h</sup> e:-ji:
-k <sup>h</sup> e:	ʼma-V-k <sup>h</sup> e:	ʼʔə-V-k <sup>h</sup> e:	ʼma-V-k <sup>h</sup> e:-la

/-t<sup>h</sup>e:/、/-k<sup>h</sup>e:/、およびこれらと対比できる/-tu/（現在の直接体験；M 接辞）の使い分けをあわせて示すと、次のようになる。

- (160) a ʼʔə-<sup>h</sup>tɕ<sup>h</sup>ɑʔ-t<sup>h</sup>e:  
[疑]-寒い-[完]  
(あなたは) 寒かったですか？
- b ʼʔə-<sup>h</sup>tɕ<sup>h</sup>ɑʔ-k<sup>h</sup>e:  
[疑]-寒い-[完]  
(水は) 冷たかったですか？
- c ʼʔə-<sup>h</sup>tɕ<sup>h</sup>ɑʔ-tu  
[疑]-寒い-[証]  
(あなたは) 寒いですか？

現在完了とアオリストの異なりは、意図性に現れる場合がある。

- (161) a ʼŋa-∅ ʼze:-no:-k<sup>h</sup>e:  
1-[絶] 言う-間違う-[完]  
私は（偶然に）言い間違ってしまった。
- b ʼŋa-∅ ʼze:-no:-zə  
1-[絶] 言う-間違う-[過]  
私は（わざと）言い間違いました。

次の対話では/-t<sup>h</sup>e:/と/-k<sup>h</sup>e:/が対比的に用いられ、用法の差異を浮き彫りにしている。

- (162) a ʼmə ʼtɕ<sup>h</sup>ə ts<sup>h</sup>eʔ-∅ ʼfiə:-t<sup>h</sup>e:  
人 どれくらい-[絶] 来る-[完]  
何人の人が来ましたか？  
(来た人数を直接的な情報に基づいて把握しているかを意図した質問)
- b ʼmə ʼŋi ɕ<sup>h</sup>u<sup>h</sup> tse-∅ ʼfiə:-k<sup>h</sup>e:  
人 20 くらい-[絶] 来る-[完]  
20 人くらいが来ました。  
(間接的な情報に基づいた数しか把握していないという言明)

現在完了とはいうが、実際の状況が完了していないように見えても、発話は成立しうる。これには、動詞語幹にそなわった固有の аспекトが作用していると考えられる。以下の例における/<sup>m</sup>baʔ/「降る」は、降り始めた時点でその動詞が表す動作が完了しているものと理解する。

<sup>48</sup> 表中の V は動詞語幹を表す。

そして、接辞の使い分けは次のように記述できる。

- (163) a ʔtʰa<sup>h</sup>ba-∅ ʔmbaʔ-t<sup>h</sup>e:  
 雨-[絶] 降る-[完]  
 雨が降ってきました。(今降っている状態にあるのを見ている)
- b ʔtʰa<sup>h</sup>ba-∅ ʔmbaʔ-k<sup>h</sup>e:  
 雨-[絶] 降る-[完]  
 (地面が濡れているから)雨が降りました。(今はやんでいる)

類似の例に、次のようなものもある。

- (164) a ʔk<sup>h</sup>o-∅ ʔziʔ<sup>h</sup>daʔ<sup>h</sup>dzaʔ-t<sup>h</sup>e:  
 3-[絶] 滑って転ぶ-[完]  
 彼は滑って転びました。(その現場を目撃した)
- a ʔk<sup>h</sup>o-∅ ʔziʔ<sup>h</sup>daʔ<sup>h</sup>dzaʔ-k<sup>h</sup>e:  
 3-[絶] 滑って転ぶ-[完]  
 彼は滑って転びました。(直接その現場を目撃していないが知っている)

現在完了の否定は、原則的に「まだ～していない」の意味になる。

- (165) ʔŋa-∅ ʔta rɔ: ʔh<sup>h</sup>tɑ: mo ʔma-ko-t<sup>h</sup>e:  
 1-[絶] まだ とても [否]-分かる-[完]  
 私はまだちゃんと分かっていません。

- (166) (ʔŋa-∅) ʔma<sup>h</sup>ka-t<sup>h</sup>e:  
 (1-[絶]) [否]-疲れる-[完]  
 (私はまだ)疲れていません。

現在完了とアオリストを対比すれば、以下のような説明を与えられるが、実際の会話において用法上区別があまり認められない傾向にある<sup>49</sup>。

- (167) a ʔtʰoʔ-∅ ʔʔə-ko-t<sup>h</sup>e  
 2-[絶] [疑]-分かる-[完]  
 分かりましたか？(今きちんと理解しているかの意)
- b ʔtʰoʔ-∅ ʔʔə-ko-zə  
 2-[絶] [疑]-分かる-[過]  
 分かりましたか？(過去に理解したかの意；今理解しているかは関係ない)

## M 接辞の証拠性

もっともよく観察されるのは /-tu/<sup>50</sup> と /-pa/<sup>51</sup> である。これらは単独の声調を担うことはない。また、この直前に否定辞や疑問接辞はつかない。

/-tu/は発話の内容が直接経験に基づくことであることを述べる。また、自らではコントロー

<sup>49</sup> 語りの場面では異なりが維持されている可能性があり、調査が必要である。

<sup>50</sup> 環境によって [-tu, -du, -<sup>n</sup>du] などの音形がある。

<sup>51</sup> この形式は環境による異なる音形をもたないようだ。

ルが効かない内的感覚 (endopathic) による発話を表す。

- (168) ʔ<sup>h</sup>a ʔə<sup>h</sup>kũ-tu  
 [疑]-のどが渴く-[証]  
 (あなたは) のどが渴きましたか？

- (169) ʔmə<sup>h</sup>toʔ-tu  
 [否]-空腹である-[証]  
 (私は) 空腹ではありません。

/-pa/は発話内容に確実性がない場合に用いられる。確実性の度合いにはかかわらない。

- (170) ʔfiɔː-pa  
 来る-[証]  
 (彼は) たぶん来るでしょう。

#### 4.6.2 語調を表す助辞

/-fiɔ/「確認、念押し」、/-mo/「確認、促し」、/-roʔ/「依頼」、また、命令文の語調を和らげる/-ta/などがよく認められる。

- (171) ʔ<sup>h</sup>dzoʔ pa ʔ<sup>h</sup>qo-fio  
 素早い 行く-[調]  
 急いで行きましょうよ。

- (172) ʔ<sup>h</sup>ta-mo  
 見る-[調]  
 (ほら) 見て！

- (173) ʔ<sup>h</sup>tʰɔ-roʔ  
 飲む-[調]  
 飲んで下さい。

- (174) ʔta rɔ̃ ʔfiɔ ʔ<sup>h</sup>tɕiʔ ʔzeː-ta  
 もう 回 1 言う-[調]  
 もう一度言ってください。

以上のほか、疑問接尾辞として機能するよう見える/-la/もここに含める。おそらく TAM 接辞/-la/と語調を整える接辞/-fia/の縮約に由来すると考えられる。この形態が現れる文は、形式上は疑問文と認めず、疑義を伴う語調を表す表現と考えるが、否定疑問文では固定的にこの接辞が用いられる<sup>52</sup>。

- (175) ʔŋo ma ʔ<sup>h</sup>qa ʔ<sup>h</sup>qa ʔreʔ-la  
 本当に こんなよう [判]-[調]  
 本当にこのようなのですか？

<sup>52</sup> 否定疑問文は、語用論上通常の疑問文とは異なり、驚きや疑いを表現に含みうる。

#### 4.6.3 伝聞を表す表現

伝聞を表すには、/sə reʔ/<sup>53</sup> を M 接辞の位置に置く。M 接辞がついた状態で伝聞を表す場合には/-ze: reʔ/を付加する。伝言する場合には動詞/-ze:/が独立した声調を担って現れ、埋め込み文を形成する。

- (176) ʼtəo wo-gə ʼkʰa [aʔ-zə reʔ-sə reʔ  
 ジョウオ-[能] 口を開く-[過]-[伝]  
 ジョウオが口を開いたそうです。(『菩薩の愛する地・塔公』)
- (177) ʼkʰo-∅ ʼta: rɔʔ ʰtoʔ-tu-ze: reʔ  
 3-[絶] まだ 空腹の-[証]-[伝]  
 彼はまだおなかがすいているそうです。

#### 4.6.4 可能性・推測を表す表現

「たぶん～、おそらく～」などの可能性・推測を表す表現は非常に豊富にあり、全体像はまだつかめていない<sup>54</sup>。もっとも単純な表現は 4.6.1 で述べた M 接辞/-pa/を用いた表現であるが、それ以外に分析の困難な形態素の連続によって表す。たとえば、以下のようなものである。

- (178) ʼkʰo-gə ʼti-zə-∅ ʔa: ʰto ʰji: tʰe:  
 3-[能] 書く-[名]-[絶] [可]  
 (これは) おそらく彼が書いたものでしょう。
- (179) ʔtʰa ʰba-∅ ʰmbaʔ-go ʰsā ɕɔ: ʰda ʰdzɯ reʔ  
 雨-[絶] 降る-[可]  
 雨が降りそうだ。
- (180) ʼŋa-∅ ʰdo-ʰdzɯ la sʰa ʰma-reʔ  
 1-[絶] 行く-[可/否]  
 私はたぶん行けないでしょう。

以上のように、否定辞などの配置を手がかりに形態素の関係を分析的に考えることは可能ではあるが、TAM 接辞群の例と同じく、ここではあえて分析的な語積を与えない<sup>55</sup>。

#### 4.7 動詞連続・動詞形容詞連続

動詞語幹は何の接続要素を伴うことなく並列することができる場合がある。これを動詞連続と呼ぶ。Lhagang 方言では動詞連続はあまり豊富ではなく、限られた要素が形成するにとどまる。特に「可能」「使役」などを表す動詞がその主たるものである。動詞連続を構成する第1の

<sup>53</sup> 環境によって [-zə reʔ] と発音される。

<sup>54</sup> このカテゴリーは epistemic modality と呼ばれ、Vokurková (2008) に詳しい。おそらく可能性・推測を表す表現の全体像は膨大で、単純な列挙ですら困難である。カムチベット語については、Tshe-ring Lha-mo (2013) により詳しい用例がある。

<sup>55</sup> 複数の形態素がまとまって新たな意味を持つ場合、分析的な語積を与えることは共時的記述にならず、歴史的な成立背景を提示するにとどまる。このため、本稿ではあえてこのように記述する。

動詞語幹が1音節語で接頭辞・接尾辞ともに取らない場合、第1の動詞語幹と第2の動詞語幹で1つの声調領域を形成する。接辞類は第2の動詞語幹につく。接頭辞類がつく場合、声調領域が分けられる。

- (181) ʔtʰoʔ-∅ ʔpoʔ hkeʔ-∅ ʔdzaʔ ʔə-çʰe:  
2-[絶] チベット語-[絶] 話す [疑]-知っている  
あなたはチベット語を話せますか？

- (182) ʔkʰa tʰo-∅ ʔze: ʔmə-ʔgo:  
ありがとう-[絶] 言う [否]-必要である  
ありがとうを言う必要はないです。/どういたしまして。

/-ŋō/「経験がある」は単独では用いられないが、TAMを表すものではないため、動詞連続の構造を取る。

- (183) ʔŋa-∅ ʔpoʔ go:-∅ ʔtʰo: ʔma-ŋō  
1-[絶] チベット服-[絶] 着る [否]-経験がある  
私はチベット服を着たことはありません。

- (184) ʔtʰoʔ-∅ ʔtə ʔda ʔze: ʔə-ŋō  
2-[絶] あのように 言う [疑]-経験がある  
あなたはあのように言ったことがありますか？

使役を表す動詞には/ʔhʔtʰeʔ/がある。これも基本的に単独では用いられない。使役文の構成には、/ʔhʔtʰeʔ/を動詞連続の第2要素とするもの(185a)のほか、先行する動詞に/ʔkʰa/をつけて名詞化したうえで/ʔhʔtʰeʔ/を本動詞とするようにみえる構造を取ることができる(185b)。いずれも語釈は同一とするが、語用論的には後者のほうが強制力がある。

- (185) a ʔla mo-la ʔla ji:-∅ ʔle:ʔhʔtʰeʔ-ʔgo  
[人名]-[与] 民謡-[絶] 歌う-させる-[必]  
ラモに民謡を歌わせなければなりません。
- b ʔla mo-la ʔla ji:-∅ ʔle:ʔkʰa ʔhʔtʰeʔ-ʔgo  
[人名]-[与] 民謡-[絶] 歌う-させる-[必]  
ラモに民謡を歌わせなければなりません。

使役の依頼を表す場合は語調を表す助辞の/ʔroʔ/を用いるが、使役者は発話者ではない点に注意が必要である(172a)。上の/ʔgo/との違いを見ると、次のようになる。

- (186) a ʔhʔa çʰi-la ʔlu ʔhʔtʰeʔ-∅ ʔle:ʔhʔtʰeʔ-ʔroʔ  
[人名]-[与] 歌 1-[絶] 歌う-させる-[調]  
タシに1曲歌を歌ってもらうように(司会者に)いましょう。
- b ʔhʔa çʰi-la ʔlu ʔhʔtʰeʔ-∅ ʔle:ʔhʔtʰeʔ-ʔgo:  
[人名]-[与] 歌 1-[絶] 歌う-させる-[必]  
タシに1曲歌を歌ってもらう必要があります。

使役の強制性/放任性はTAM接辞で表現する。放任の意味では/ʔgo/が用いられない。

- (187) 'ŋa-∅ ʔtɕʰə<sup>h</sup>ŋɛ-la ʔa na ʰtɕa xa-∅ ʰto:-ʰtɕuʔ-zə  
 1-[絶] 犬-[与] ここで 糞-[絶] する-させる-[過]  
 私は犬にここで糞をさせました。

第2の動詞にさまざまな接辞や修飾語が付加されうるため、第1と第2の動詞が連続しているように見えない場合もあるが、文の構造としては動詞連続とみなせる。

- (188) 'ŋa-∅ ʰdo ʰtɕaʔ mo ʰmə-ʰsā-tu  
 1-[絶] 行く ととも [否]-思う-[証]  
 私はそんなに行きたくありません。

継起する動作を表したり、移動動詞をともなう場合、Lhagang 方言では動詞連続ではなく、先行する動詞を名詞化する必要がある。

- (189) 'ŋaʔ-∅ ʰŋa: mo ʔtɕʰoʔ-∅ ʰsu-sʰa ʰfið-li:  
 1-[絶] 朝 2-[絶] 迎える-[名] 来る-[意]  
 私は朝あなたを迎えに来るつもりです。

しかし一方、継起ではなく、移動を伴う同時進行的動作については動詞連続が許容される。

- (190) ʔkʰo-∅ ʰpʰa ru ʔʰiʔ-ʰdo-ʰkʰɛ-∅ ʔtɕʰoʔ-∅ ʔə-ji:  
 3-[絶] あそこ 連れる-行く-[名]-[絶] 2-[絶] [疑]-[判/E]  
 彼をあそこへ連れていったのはあなたですか？

動詞と形容詞の連続では、先行する動詞には何もつかず、形式上動詞連続として現れる。

- (191) 'ŋa-∅ ʔze:-no:-kʰe:  
 1-[絶] 言う-誤る-[完]  
 私は言い間違えてしまいました。

#### 4.8 呼応する動詞句表現

Lhagang 方言には2句以上の動詞句を結ぶ固定された表現があり、そこに現れる現象には以上の記述に現れなかったものも含まれる。

(名詞句+) ʔə-動詞/形容詞+ (名詞句+) ʔə-動詞/形容詞 「～も～も」

/ʔə-/という形態は疑問接辞と似ているが、声調が異なる点に注意が必要である。

- (192) ʰmbu<sup>h</sup> dzu-∅ ʔə-ʰsa:-reʔ ʔjɛ lu-∅ ʔə-joʔ reʔ  
 薪-[絶] も-燃やす-[判] 電気コンロ-[絶] も-[存]  
 薪も燃やすし、電気コンロもあります。

形容詞+**-tse** +形容詞+**-tse** 「時に～時に～」

/-tse/は動詞接尾辞と同じふるまいをし、先行する述語形容詞と1つの声調領域を形成する。/-tse/がつく複数の述部は同一の主部をもつ。

- (193) ʰnā ŋo-∅ ʔto-tse ʰtɕʰaʔ-tse  
 天気-[絶] 暖かい-時に 寒い-時に  
 天気は時に暖かく、時に寒いです。

**<sup>h</sup>tɕe? me? + 動詞句 + <sup>h</sup>tɕe? me? + 動詞句 「～たり～たりする」**

/<sup>h</sup>tɕe? me?/はこれだけで独立の声調をもち、文中では副詞のようにふるまう。この要素は動詞の直前に置かれるほか、何らかの名詞句が動詞の前に現れても構造上は問題ない。

- (194)   <sup>h</sup>tɕe? me?   <sup>h</sup>tɕe? me?   <sup>h</sup>tɕe? me?   <sup>h</sup>tɕe? me?   <sup>h</sup>tɕe? me?  
 たり            晴れる    たり            雨-[絶]        降る  
 晴れたり雨が降ったりします。

**ʼjə mə ˉna + 動詞句-za? + ʼjə mə ˉna + 動詞句-za? 「～するか～するかである」**

文の構造を子細に観察すると、/ʼjə mə ˉna/の部分には複文の形式をとっていると考えられる(5.4 参照)。しかし慣用的な表現になっているとも考えることができる。

- (195)   ʼji ge-<sup>n</sup>də-∅    ʼjə mə ˉna    <sup>h</sup>tsō-za?    ʼjə mə ˉna    ˉmə<sup>h</sup>de ts<sup>h</sup>o-la    ˉzi:-za?  
 本-この-[絶]    するか        売る-[調]    するか        他人-[与]        与える-[調]  
 この本は、売ってしまうか、ほかの人にあげなさい。

**ˉte: + 動詞句 + ˉte: + 動詞句 「～であればあるほどより～」**

/ˉte:/が単独でどのような意味を担っているかは不明であるが、動詞または形容詞の直前に置かれる。

- (196)   ˉte:            ˉŋa:    ˉte:            ˉja?-re?  
 どんどん    早い    どんどん    よい-[判]  
 早ければ早いほどよりよいです。

以上の形式に関連するものとして、次のようなものがある。

- (197)   <sup>h</sup>o?-∅    ˉte: ta ˉte:    <sup>h</sup>a ˉ<sup>h</sup>dza? pa    <sup>h</sup>qo-ci: tu  
 2-[絶]    どんどん    太る                    行く-[進]  
 あなたはどんどん太っていています。

/ˉte: ta ˉte:/に含まれる/ˉte:/は例文(196)に用いられる形態素と同一であるが、中間の/ta/が単独でどのような意味を持っているのは解釈できないため、これら3音節をひとかたまりにして「どんどん」と語積を与える。

なお、「どんどん」を表す表現としては、以下のように/<sup>h</sup>tē za?/を用いる例もある。この要素は/ˉte: ta ˉte:/と交替可能である。

- (198)   <sup>h</sup>o?-∅    ˉ?a ma-da    <sup>h</sup>tē za?    <sup>h</sup>qo-ci: tu  
 2-[絶]    母-[共]        どんどん    似ている-[進]  
 あなたはどんどん母親に似てきています。



## 5 文のタイプと分類

本節では Lhagang 方言の文の構造とタイプ別の記述を行う<sup>56</sup>。

### 5.1 文の成立

Lhagang 方言は、他のチベット系諸言語と同じく、典型的には動詞述部を文末に置く構造を取る。

Lhagang 方言における発話は、間投詞のようなものを除いたとしても、名詞か動詞のどちらか一方で成立する 1 語文がある。あいさつ語も 1 語文で成立するものがある。

(199)    ʔp<sup>h</sup>ɑʔ<sup>h</sup> gɛ-∅  
ぶた-[絶]  
ぶた (だ) !

(200)    ʔ<sup>h</sup>do  
行く  
行こう。

(201)    ʔ<sup>h</sup>de mo  
さようなら  
さようなら。

(199) は、たとえば話者の近くにぶたの存在を認めたときの発話として成立する<sup>57</sup>。(200) は頻繁に認められる発話である。語用論的には勧誘を表している。(201) はあいさつ語の例で、1 語で成立し、また、これ以上形態素分析もできない。また、次のように、形態素分析は可能であるが、動詞述部 1 語で成立する発話がある。この種の表現は非常に豊富である。

(202)    ʔ<sup>h</sup>ɛɛ-tu  
よろしい-[証]  
よろしいです。/OK。

また、名詞からなる 1 語文を除けば、動詞句を伴わない名詞文は原則的に用いられない。加えて、間投詞を除いて名詞とも動詞ともつかない語が認められる。次のような例は副詞と呼ぶことができる：/-fia/<sup>58</sup>「～も (また)」、/rō/「～自身 (で)」、/ʔnā<sup>m</sup>bu/「いっしょに」、/ʔ<sup>h</sup>ā tɕeʔ/「みんな」、/lo:/「当然」、/ʔ<sup>h</sup>tɑʔ mo/「ととも」など。副詞は基本的に修飾する動詞句の直前に置かれる。ただし/-fia/は名詞句に後続する形で用いられる。

(203)    ʔ<sup>h</sup>ɑ-∅-fia    ʔ<sup>h</sup>ɛ    ʔ<sup>h</sup>tɑʔ mo    ʔ<sup>h</sup>ga-tu  
1-[絶]-も    心    ととも    うれしい-[証]  
私もとてもうれしいです。

<sup>56</sup> 文のタイプの記述は澤田編 (2013) を参考にしている。

<sup>57</sup> 塔公寺の周辺には、放生の一環としてぶたが放し飼いにされている。村全体で世話をしているようだ。

<sup>58</sup> 声調は先行する形態素と同一の範囲内におさまるように見える。接辞である可能性もある。

- (204) ʔkʰo-∅ ʔᵛdo-li: ʔze: ʔna ʔŋa-∅-fia ʔᵛdo-li:  
 3-[絶] 行く-[意] 言う ならば 1-[絶]-も 行く-[意]  
 彼が行くと言うなら、私も行きましょう。

接続詞については 5.4 を参照。

## 5.2 文のタイプ

Lhagang 方言においては、平叙文と疑問文が形態統語的に明確に区別される。命令文は命令の対象（通常は2人称）が伴わず発話として成立している場合をいう。しかし、実際にはほとんどの場合で2人称代名詞が文中に現れることが可能で、このとき記述の上では平叙文と変わらず、発話時の語調などによって機能が変わってくるといえる。また、文のタイプとしては勸奨文や祈願文が言及されうるが、Lhagang 方言では命令文もしくは平叙文と構造上変わることがない。

以下、平叙文、疑問文、命令文について記述する。

### 5.2.1 平叙文

- (205) ʔŋa-∅ ʔkʰε le:-li:  
 1-[絶] 同意する-[意]  
 私は同意しましょう。
- (206) ʔŋa-∅ ʔmə-ʰtoʔ-tu  
 1-[絶] [否]-空腹だ-[証]  
 私は空腹ではありません。

次の文は意味的には禁止命令を表しているが、行為者が発話に現れるため、文のタイプとしては平叙文に含められる。

- (207) ʔtʰoʔ-∅ ʔji ʔye-∅ ʔma-ti  
 2-[絶] 文字-[絶] [否]-書く  
 あなたは字を書いてはいけません。

次の文は意味的に祈願を表しているが、行為者が発話に現れるため、文のタイプとしては平叙文に含められる。

- (208) ʔtʰoʔ-∅ ʔᵻde mo ʔtsʰā mbo ʔji:-ᵻgo  
 2-[絶] 平安な 願い [判]-[必]  
 あなたが平安でありますように。

### 5.2.2 疑問文

疑問文には諾否疑問文、疑問詞疑問文、付加疑問文、選択疑問文などの種類がある。

諾否疑問文は疑問接辞を動詞句に付加して表す。4.1 で述べたように、疑問接頭辞は動詞/形容詞語幹の直前に付加されるか、TAM 接辞群の中に述語動詞が含まれる場合はその直前に付加される。

- (209) ʔtʰoʔ-∅ ʔə-ᵐdo  
 2-[絶] [疑]-行く  
 あなたは行きますか？
- (210) (ʔtʰoʔ-∅) ʔə-ŋɛ:-tu  
 (2-[絶]) [疑]-よい-[証]  
 (あなたは) 元気ですか？
- (211) (ʔtʰoʔ-∅) ʔə-ᵐka-tʰe:  
 (2-[絶]) [疑]-疲れる-[完]  
 (あなたは) 疲れませんか？
- (212) ʌnõ la-∅ ʔᵐā tʰeʔ ʔᵐde mo ʔə-reʔ  
 家族-[絶] みんな 元気だ [疑]-[判]  
 家族全員元気ですか？
- (213) ʔᵐdə-∅ ʔtʰə tə-∅ ʔreʔ  
 これ-[絶] 何-[絶] [判]  
 これは何ですか？

否定文の疑問には/-la/が用いられるが、肯定文に用いられることもある。

- (214) ʔkʰo-∅ ʔɕo: tʰā ʔᵐa: ᵐõ-∅ ʔma-reʔ-la  
 3-[絶] 学生-[絶] [否]-[判]-[疑]  
 彼は学生でないのですか？
- (215) ʔkʰo-∅ ʔma-ᵐtʰo-kʰe:-la  
 3-[絶] [否]-飲む-[完]-[疑]  
 彼は飲まなかったのですか？
- (216) ʔə-ᵐda ʔreʔ-la  
 このように [判]-[疑]  
 このようですよ？

形式は疑問文であるが、あいさつ言葉として機能するものがある。

- (217) ʔə-ᵐde  
 [疑]-元気だ  
 元気ですか？ (=おはよう<sup>59</sup>)

付加疑問文は形式的には認められないが、それと同義となる構造として、文末に/-la/または/-la ʔə-ji:/を配することで成立する。

<sup>59</sup> この形式は Lhagang 方言の分布域の周辺で話されるアムドチベット語にも見られ、起源的には Lhagang-B の表現ではないかもしれないが、現在では広く使われている。

- (218) a ʔe<sup>h</sup>oʔ-la ʔe<sup>h</sup>a ni-∅ ʔmeʔ-lə ʔə-ji:  
 2-[与] 兄弟-[絶] [否/存/疑]  
 あなたには兄弟がいないのですよね？
- b ʔe<sup>h</sup>oʔ-la ʔe<sup>h</sup>a ni-∅ ʔmeʔ-la  
 2-[与] 兄弟-[絶] [否/存]-[疑]  
 あなたには兄弟がいないのですよね？

選択疑問文の場合、選択する要素の間に TAM 接辞/-lə reʔ/を配するか、接続詞-ta 「または」を用いるか、またはその両方を用いるかのなどの方法で構成される<sup>60</sup>。

- (219) ʔe<sup>h</sup>oʔ-∅ ʔa p<sup>h</sup>a-la ʔda-lə reʔ ʔa ma-la ʔda-reʔ  
 2-[絶] 父-[与] 似る-[未] 母-[与] 似る-[判]  
 あなたは父親に似ていますか、それとも母親に似ていますか？
- (220) ʔ<sup>h</sup>dza-jiʔ-∅ ʔə-reʔ -ta ʔpoʔ jiʔ-∅ ʔreʔ  
 漢語-[絶] [疑]-[判] または チベット語-[絶] [判]  
 (それは) 漢語ですか、それともチベット語ですか？
- (221) ʔpā li-∅ ʔe<sup>h</sup>oʔ ʔa ʔza-ʔ<sup>h</sup>go reʔ ʔ<sup>h</sup>lū mba ʔza-ʔ<sup>h</sup>go reʔ -ta  
 栗-[絶] どのように 食べる-[必] 生の 食べる-[必] または  
 ʔ<sup>h</sup>tso-nə ʔza-ʔ<sup>h</sup>go reʔ  
 蒸す-[名] 食べる-[必]  
 栗をどのように食べますか？生で食べますか、それとも蒸して食べますか？

### 5.2.3 命令文

命令文と勧誘文は、行為者は発話に現れないという点で、構造的には同じである。

- (222) ʔza ma-∅ ʔza  
 ごはん-[絶] 食べる  
 ごはんを食べなさい。/召し上がれ。
- (223) ʔta <sup>h</sup>ta ʔma-s<sup>h</sup>o:  
 今 [否]-行く.[命]  
 今行くな！
- (224) ʔ<sup>h</sup>ū <sup>h</sup>tceʔ ʔ<sup>h</sup>ga <sup>h</sup>sui zuu  
 みんな 歓迎する  
 (私たち) みんなで歓迎しましょう！

<sup>60</sup> 形態素/-lə reʔ/は本来的には/-lə ʔə-reʔ/であるかもしれない。6.4.1 を参照。例文 (220) を見れば分かるように、選択する要素の第 1 項の動詞は疑問接辞を伴うが、第 2 項の動詞は疑問接辞を伴わない。

ただし、次のように命令形と非命令形が異なる動詞の場合、命令文には命令形が、勧誘文には非命令形が用いられる<sup>61</sup>。

- (225) 'ka le      ˉsho:  
 ゆっくり 行く.[命]  
 ゆっくり行きなさい。(=気をつけて)

- (226) ˉŋdo  
 行く  
 行きましょう。

### 5.3 文の埋め込み

平叙文の埋め込みでは、通常補文標識を伴わない。

- (227) ˉŋa-∅    ˉta: rɔʔ    ˉtɕʰoʔ-∅    ˉʔa na    ˉfiɔ:-zə reʔ    ˉhsā-zə  
 1-[絶]    まだ    2-[絶]    ここ    来る-[過]    思う-[過]  
 私はまだあなたがここに来ると思っていました。

ただし、埋め込み文を主題化する場合は/ˉ<sup>h</sup>dʒu/を付加する。すなわち名詞化して埋め込むことになる。

- (228) ˉŋa-∅    ˉla s<sup>h</sup>a mə    ˉji:-<sup>h</sup>dʒu-∅-tə    ˉshu    ˉhɕiʔ-gə    ˉ<sup>h</sup>dɛ̃ la ˉmə-<sup>h</sup>dʒə  
 1-[絶]    ラサ人    [判]-[名]-[絶]-[主]    誰    1-[能]    信じる [否]-[語幹]  
 私がラサ人であるとは誰 1 人信じません。

諾否疑問文もしくは疑問語を含む文の埋め込みでは、埋め込まれた文に補文標識/ˉhɕiʔ/を伴うことが多い。補文標識の代わりに名詞化標識を用いても容認されることもある。補文標識は文中において絶対格を役割を付されているものと理解し、ゼロ形態の存在を記述しない。

- (229) ˉtɕʰoʔ-∅    ˉk<sup>h</sup>o-∅    ˉʔa na    ˉʔə-<sup>h</sup>tse:    ˉmə-<sup>h</sup>tse:-k<sup>h</sup>e-<sup>h</sup>ɕiʔ    ˉhta-ta  
 2-[絶]    3-[絶]    ここ    [疑]-着く    [否]-着く-[完]-[補]    見る-[調]  
 あなたは彼がここへ到着したかどうか確認してください。

- (230) ˉtɕʰoʔ-∅    ˉk<sup>h</sup>o-∅    ˉ<sup>h</sup>ge <sup>h</sup>gɛ-la    ˉtɕə tə-∅    ˉze:-<sup>h</sup>dʒu    ˉ<sup>h</sup>laʔ-pa  
 2-[絶]    3-[絶]    先生-[与]    何-[絶]    言う-[名]    教える-[証]  
 あなたは彼が先生に何を言うか教えなさい。

また、補文標識は主題標識を伴うことができる。

- (231) ˉk<sup>h</sup>o-∅    ˉŋa-∅    ˉtɕə tə-∅    ˉji:    nə    ˉza-ɳɛ:-<sup>h</sup>ɕiʔ-tə    ˉha ˉko-reʔ  
 3-[絶]    1-[絶]    何-[絶]    [判]    ても    食べる-できる-[補]-[主]    分かる-[判]  
 彼は私が何であろうと食べることができるということを分かっています。

命令文（勧誘文）の埋め込みでは、補文標識を伴わない。

<sup>61</sup> 実際のところ、「行く」と「来る」のみ命令形と非命令形が異なる。4.3 参照。これら以外の動詞については、発話の調子（口調）によって命令か勧誘かどちらの意味であるのかを判断することになる。

- (232) ʔa p<sup>h</sup>a-∅ ʔa-la ʔe: ka ʔe:-s<sup>h</sup>o: ʔe:-tu  
 父-[絶] 1-[与] 仕事 する-行く.[命] 言う-[証]  
 父は私に仕事に行きなさいと言いました。

#### 5.4 複文

等位関係を表す並列文は通常接続詞を必要とせず、第1文には TAM を表す接辞類がつかないことが多い。ただしイントネーションが異なり、発話としてひとかたまりになっていることが分かる<sup>62</sup>。

- (233) ʔ<sup>h</sup>aʔ ʔnaʔ naʔ-∅-tə ʔ<sup>h</sup>o ts<sup>h</sup>o-gə ʔ<sup>h</sup>so-zə reʔ ʔa-gə ʔ<sup>h</sup>so-zə ʔma ji:  
 黒ぶた-[絶]-[主] 3.[複]-[絶] 育てる-[過] 1-[能] 育てる-[過/否]  
 黒ぶたは彼らが飼っていたのであり、私が飼っていたではありません。
- (234) ʔta ri ʔ<sup>h</sup>na ʔo-∅ ʔmə-jaʔ-tu ʔ<sup>h</sup>a ʔba-∅ ʔə-mbaʔ ʔmə-ko-tu  
 今日 天気-[絶] [否]-よい-[証] 雨-[絶] [疑]-降る [否]-分かる-[証]  
 今日気は良くありません。雨が降るかもしれません。

#### ʔna

条件や時間的順序に従って継起する事象を時間を表す要素を用いず表す場合、接続詞 ʔna が用いられる。

- (235) ʔtə ʔda ʔ<sup>h</sup>zo ʔna ʔə-ʔe:-tu  
 あのように すると [疑]-よい-[証]  
 あのようにしたらいいですか？
- (236) ʔ<sup>h</sup>e p<sup>h</sup>jo-∅ ʔno-roʔ ʔzə ʔna ʔə-ʔe:  
 チケット-[絶] 買う-[依頼] 言う と [疑]-よい  
 チケットを買ってくれませんかと言ったら、よろしいですか？  
 (=チケットを買ってくれませんか？)

譲歩を表す場合にも接続詞 ʔna が用いられる。

- (237) ʔ<sup>h</sup>a ʔba-∅ ʔmbaʔ ʔna ʔ<sup>h</sup>oʔ-∅ ʔdo-ʔdzu ʔə-ji:-ta  
 雨-[絶] 降る ても 2-[絶] 行く-[未/疑/E]-[調]  
 雨が降っても、あなたは行くのですか？

また、次のような例もある。本来埋め込まれる文が複文化したものである。

- (238) ʔa ma-∅ ʔa-la ʔe: ʔna ʔ<sup>h</sup>dzoʔ pa ʔs<sup>h</sup>o: ʔe:-tu  
 母-[絶] 1-[与] 言う と 急いで 行く.[命] 言う-[証]  
 母が私に言うことには、「急いで行きなさい」と。

3.4 でも述べたことであるが、接続詞 ʔna は疑問語とともに用いられて疑問語を不定語と解釈する文を形成する。このとき、ʔna を伴う従属文は、主文の中に割り込むことが多い。

<sup>62</sup> ただし例文 (233, 234) はイントネーションを記述しないため、単に2つの文が羅列されているように見える。

- (239) 'mə 'ṽdṽ ṽdṽ-∅ 'ka na 'ji: 'na 'jo:-re?  
 =(20) 人 このような-[絶] どこ [判] ても [存]  
 こんな人はどこにでもいます。

例文 (239) では 'na を伴う従属文は /'ka na 'ji:/ の範囲にとどまると考えられる。これが主文 /'mə 'ṽdṽ ṽdṽ-∅ 'jo:-re?/ の中に割り込んで入っていることになる<sup>63</sup>。

#### nə<sup>64</sup> 「～して、～しながら」

- (240) -k<sup>h</sup>o-∅ -ṽda-∅ 'ṽdzṽ? nə -'ci tsi-∅ 'ṽse?-t<sup>h</sup>e:  
 3-[絶] 矢-[絶] 放つ て 鳥-[絶] 殺す-[完]  
 彼は矢を放って鳥を殺しました。
- (241) -t<sup>h</sup>o? ts<sup>h</sup>o-∅ -ṽta ṽgṽ-∅ -ṽgō nə 'ka na 'ṽdṽ-li:  
 2.[複]-[絶] 馬-[絶] 乗る て どこ 行く-[意]  
 あなたたちは馬に乗ってどこに行くのですか？

#### -ṽka?<sup>65</sup> 「～のときに」

/-ṽka?/ を伴う従属文の中では、TAM に関する表示が行われないことが通例である。時間関係は主文の TAM および文脈とあわせて理解される。

- (242) 'ṽṽ la 'ṽdṽ -ṽka?-la -'ṽo? ṽdu?-∅ -k<sup>h</sup>u-ṽdzṽ-∅ 'ma-ṽdze?  
 外 行く とき-[位] 傘-[絶] もっていく-[名]-[絶] [否]-忘れる  
 外へ行くとき、傘を持っていくのを忘れるな。
- (243) 'ṽdzṽ ṽza 'kō dzo-∅ 'po-la 'ja la 'ṽde tō -ṽka?-la  
 文成公主-[絶] チベット-[位] 上へ 迎える とき-[位]  
 -ṽṽ 'ṽdzṽ po-gṽ 'k<sup>h</sup>o-la 'ṽeo wo 'ṽci?-∅ 'zī-zṽ re?  
 唐の皇帝-[能] 3-[位] ジョウオ 一-[絶] 与える-[過]  
 文成公主がチベットへと迎えられるとき、唐の皇帝は彼女に一体のジョウオを  
 与えました。(『菩薩の愛する地・塔公』)

#### 'ma ze? 「～しないだけでなく」

- (244) 'tsi γi-∅ 'mō ṽzi?-la 'mṽ-ṽtṽ? 'ma ze? 'ta: rṽ?  
 ねずみ-[絶] 猫-[絶] 恐れる しないだけでなく なお  
 'mō ṽzi?-∅ 'ṽte-ṽci: tu  
 猫-[絶] 追う-[進]  
 ねずみが猫を恐れないだけでなくさらに猫を追うのです。

<sup>63</sup> もちろん、不定疑問の構文を一種の慣用表現ととらえ、文の主従関係を認めないという分析も可能であろう。

<sup>64</sup> この形式は声調を担わない。ゆえに、動詞接辞と分析することも可能である。

<sup>65</sup> これは接続詞ではなく、時間を表す名詞と分析する。位格標識を付加することができる。

## 付録：融合的語釈と分析的語釈の対照

ここでは、存在動詞および TAM 接辞群に対する語釈について、本稿で採用している融合的語釈の例と、それぞれの形態素に分析的語釈を与えた例を対比し、読者の理解に供する。なお、音表記の部分は分析的に記述してある。なお V は動詞語幹を意味する。

- (A) 音形式 'meʔ  
 融合的 [否/存]  
 分析的 [否/存]  
 参考 4.2.2 存在動詞
- (B) 音形式 'joʔ-lə-ˆma-reʔ  
 融合的 [否/存]  
 分析的 [存]-[未]-[否]-[判]  
 参考 4.2.2 存在動詞
- (C) 音形式 'meʔ-lə-ʔə-ji:  
 融合的 [否/存/疑/E]  
 分析的 [否/存]-[未]-[疑]-[判/E]  
 参考 4.2.2 存在動詞
- (D) 音形式 -çə-ji:-tu  
 融合的 -[進]  
 分析的 -[進]-[存]-[証]  
 参考 4.6.1 TAM を表す接辞群・進行
- (E) 音形式 -lə-ˆma-ji:-la  
 融合的 -[否/未/E/疑]  
 分析的 -[未]-[否]-[判/E]-[疑]  
 参考 4.6.1 TAM を表す接辞群・未完了
- (F) 音形式 'ma-V-zə-ʔə-reʔ  
 融合的 [否]-V-[疑/過]  
 分析的 [否]-V-[過]-[疑]-[判]  
 参考 4.6.1 TAM を表す接辞群・アオリスト
- (G) 音形式 -<sup>fi</sup>dʒu-ˆma-reʔ-pa  
 融合的 -[否/未]-[証]  
 分析的 -[未]-[否]-[判]-[証]  
 参考 4.6.1 TAM を表す接辞群・未完了



## 略号表

文法機能語で略号を作らないものは直接 [ ] の中に機能を書き込んでいる。複数の略号が重なるときは / で区切って示す。語形変化で何らかの文法的機能を表す場合は、語義のあとに . をはさんで機能を書き入れる。

1 .....	1 人称	[重] .....	重複
2 .....	2 人称	[命] .....	命令形
3 .....	3 人称	[否] .....	否定
[絶] .....	絶対格	[方] .....	方向
[能] .....	能格	[疑] .....	疑問
[与] .....	与格	[未] .....	未来
[属] .....	属格	[進] .....	進行
[位] .....	位格	[E] .....	egophoric
[具] .....	具格	[意] .....	意思未来
[奪] .....	奪格	[過] .....	アオリスト/過去
[領] .....	受領格	[完] .....	現在完了
[比] .....	比較格	[証] .....	証拠性
[名] .....	名詞化標識	[可] .....	可能性
[位名] .....	位置名詞	[伝] .....	伝聞
[複] .....	複数	[調] .....	語調助辞
[集] .....	集合	[補] .....	補文標識
[量] .....	量詞	[主] .....	主題標識
[判] .....	判断動詞	注 <sup>66</sup>	
[存] .....	存在動詞		

なお、例文中に（『菩薩の愛する地・塔公』）と注記しているのものは、当該例文が語り『菩薩の愛する地・塔公』によるもので、物語の全体と記述は鈴木ほか (2015a) に基づいている<sup>67</sup>。

<sup>66</sup> egophoricity に対する語積 [E] については、形態素に対応するいうよりはむしろ、文全体として egophoricity の意味が特に現れる場合に用いる。そうでない場合は語積を省略する。

<sup>67</sup> ただし一部の分析については、本稿の提示と当該文献のものとの間に異なりがある場合がある。

## 参考文献

- 澤田英夫 (編) (2010) 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』東京外国語大学  
アジア・アフリカ言語文化研究所
- (2013) 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2：述語と発話行為のタイプからみた文の下  
位分類』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 鈴木博之 (2005) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1–23
- (2006) 「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の方言特徴とその背景」『ニダバ』第 35 号 39–47
- (2009) 〈川西地区“九香線”上の藏語方言：分布與分類〉《漢藏語學報》第 3 期 17–29
- (2014) 「カムチベット語小中甸・吹亞頂 [Choswateng] 方言の文法スケッチ」千田俊太郎・  
伊藤雄馬編『地球研言語記述論集』6, 1–40
- 鈴木博之、四郎翁姆、拉姆吉 (2015a) 「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の物語『菩薩の愛する  
地・塔公』訳注—塔公方言の多層構造と物語の異同に関する考察を添えて—」千田俊太郎・  
伊藤雄馬編『地球研言語記述論集』7, 111–140
- (2015b) 〈塔公藏語長篇故事《菩薩喜歡的地方・塔公》語法註釋—兼談塔公藏語的多重語  
言層及故事版本的異同問題—〉《東方藏區諸語言研究》163–195 四川民族出版社
- DeLancy, Scott (2011) “Optional” “ergativity” in Tibeto-Burman languages. *Linguistics of Tibeto-  
Burman Area* 34.2, 9–20.
- LaPolla, Randy (1992) ‘Anti-ergative’ marking in Tibeto-Burman. *Linguistics of Tibeto-Burman  
Area* 15.1, 1–9.
- Lha-mo-skyid (2010) *Mi-nyag sa-khul-gyi kha-skad-kyi khyad-chos-la rags-tsam gleng-pa*. 西北  
民族大學畢業論文
- Sonam Wangmo [bSod-nams dBang-mo] (2013) *Lhagang Monastery in Myth, History and Con-  
temporary Society*. Master Thesis, Universitetet i Oslo.
- (2014) *lHa-sgang dgon dang de’i spyi-tshogs phan-nus-skor gleng-ba*. 中央民族大學碩士  
論文
- (2016) *Constructing local identity in Lhagang Village in Kham Minyag*. Paper presented at  
14th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (Bergen)
- (forthcoming) The changing relationship between monastic and local community: The ex-  
ample of Lhagang rural Township in Kham Minyag. *Études Mongoles & Sibériennes, Cen-  
trasiatiques & Tibétaines* (in press)
- Suzuki, Hiroyuki (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case  
study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —. In Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Sub-  
stratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report*  
Vol.3, 15-34, National Museum of Ethnology.
- (2014a) Issues in the lexical complexity in Eastern Tibetic languages: from a cat’s eye. *Papers*

- from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*, 116–125.
- (2014b) Brief introduction to the endangerment of Tibetic languages: special reference to the the language situation in Eastern Tibetan cultural area. *The Journal of Linguistic Studies* Vol.19 No.3, 281–301.
- (2016) *When the 'brog-skad, rong-skad, and logs-skad meet: Describing Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang*. Paper presented at 14th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (Bergen)
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2014) *Lhagang [Tagong] Tibetan as a member of the Minyag Rabgang group of Khams — a sociolinguistic description* —. Paper presented at 47th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics (Kunming)
- (2015a) Quelques remarques linguistiques sur le tibétain de Lhagang, «l'endroit préféré par le Bodhisattva». *Revue d'études tibétaines* Vol. 32, 153–175.
- (2015b) Challenge to discover endangered Tibetic varieties in the easternmost Tibetosphere: a case study on Dartsendo Tibetan. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 38.2, 256–270 [Original version presented at 4th International Workshop on the Sociolinguistics of Language Endangerment (Chiangmai, 2015)]
- (2015c) *Evidential system in Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang Khams (Dartsendo, Sichuan)*. Paper presented at 68th Meeting of Kijutsuken: Descriptive Linguistics Study Group (Kyoto)
- (2015d) Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang Khams: Vocabulary of two sociolinguistic varieties. *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 10, 245–286.
- (2016) Lhagang Choyu: First look on its sociolinguistic status. *Studies in Asian Geolinguistics* 2 (in press)
- (2017) Language evolution and vitality of Lhagang Tibetan, a Tibetic language as a minority in Minyag Rabgang. *International Journal of the Sociology of Language* 245 (in press) [Original version presented at the workshop on the linguistic minorities of the Chinese Tibetosphere (Uppsala, 2014)]
- Tournadre, Nicolas & Randy J. LaPolla (2014) Towards a new approach to evidentiality: Issues and directions for research. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37.2, 240–263.
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic Languages: An Introduction to the Family of Languages Derived from Old Tibetan* (with collaboration of Konchok Gyatsho and Xavier Becker)
- Tshe-ring Lha-mo (2013) *Khams sDe-dge-skad-kyi brda-sprod*. 民族出版社
- Vokurková, Zuzana (2008) *Epistemic modalities in Spoken Standard Tibetan*. PhD dissertation, Karel University and University of Paris 8.
- Zeisler, Bettina (2004) *Relative Tense and Aspectual Values in Tibetan Languages: A Comparative*

*Study*. Mouton de Gruyter.

Zhang, Jichuan (1996) A sketch of Tibetan dialectology in China: Classifications of Tibetan dialects. *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25 (1), 115–133.

黄成龍 (2013) 〈藏緬語存在類動詞的概念結構〉《民族語文》第2期 31-48

格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med] (1985) 〈藏語巴塘話的語音分析〉《民族語文》第2期 16–27

瞿靄堂、金效靜 (1981) 〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第3期 76–84

張濟川 (1993) 〈藏語方言分類管見〉戴慶廈等編《民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集》297-309 中央民族學院出版社

朱曉農 (2010)《語音學》商務印書館

### [付記]

筆者による Lhagang 方言の言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001)
- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21-23 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007)
- 平成 25-27 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (B) 「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」(研究代表者：鈴木博之、課題番号 25770167)

	3.8.2 用法 . . . . .	44
	3.9 形容詞：修飾用法として . . .	49
	3.10 主題標識 . . . . .	50
<b>目次</b>		
<b>1 はじめに</b>		<b>21</b>
<b>2 Lhagang 方言の音体系</b>		<b>23</b>
2.1 音節構造 . . . . .	23	
2.1.1 最大の音節構造 . . . . .	23	
2.1.2 具体例 . . . . .	23	
2.2 超分節音素 . . . . .	24	
2.2.1 声調とその表記 . . . . .	24	
2.2.2 具体例 . . . . .	24	
2.3 母音 . . . . .	25	
2.3.1 母音の舌位置による一覧 . .	25	
2.3.2 具体例 . . . . .	25	
2.4 子音 . . . . .	26	
2.4.1 子音音素一覧 . . . . .	26	
2.4.2 具体例 . . . . .	26	
<b>3 名詞句</b>		<b>31</b>
3.1 名詞句の基本構造 . . . . .	31	
3.2 名詞 . . . . .	31	
3.3 代名詞 . . . . .	32	
3.3.1 人称代名詞 . . . . .	32	
3.3.2 指示代名詞 . . . . .	33	
3.4 疑問語 . . . . .	34	
3.5 名詞化標識 . . . . .	38	
3.6 位置名詞の文法化 . . . . .	40	
3.7 数詞・量詞 . . . . .	40	
3.7.1 基数詞 . . . . .	40	
3.7.2 序数詞 . . . . .	42	
3.7.3 不定標識 . . . . .	42	
3.7.4 集合標識 . . . . .	42	
3.7.5 量詞 . . . . .	42	
3.8 格体系 . . . . .	43	
3.8.1 格標識一覧表 . . . . .	43	
<b>4 動詞句</b>		<b>50</b>
4.1 動詞の基本構造 . . . . .	50	
4.2 述語動詞 . . . . .	51	
4.2.1 判断動詞 . . . . .	51	
4.2.2 存在動詞 . . . . .	53	
4.3 本動詞 . . . . .	56	
4.4 形容詞：述語用法として . . .	57	
4.5 接頭辞類 . . . . .	58	
4.5.1 方向接辞 . . . . .	58	
4.5.2 否定辞 . . . . .	59	
4.5.3 疑問接辞 . . . . .	60	
4.6 接尾辞類 . . . . .	61	
4.6.1 TAM を表す接辞群 . . . . .	61	
4.6.2 語調を表す助辞 . . . . .	72	
4.6.3 伝聞を表す表現 . . . . .	73	
4.6.4 可能性・推測を表す表現 . .	73	
4.7 動詞連続・動詞形容詞連続 . .	73	
4.8 呼応する動詞句表現 . . . . .	75	
<b>5 文のタイプと分類</b>		<b>77</b>
5.1 文の成立 . . . . .	77	
5.2 文のタイプ . . . . .	78	
5.2.1 平叙文 . . . . .	78	
5.2.2 疑問文 . . . . .	78	
5.2.3 命令文 . . . . .	80	
5.3 文の埋め込み . . . . .	81	
5.4 複文 . . . . .	82	
<b>付録：融合的語釈と分析的語釈の対照</b>		<b>84</b>
<b>略号表</b>		<b>85</b>
<b>参考文献</b>		<b>86</b>

## A sketch grammar of Lhagang Tibetan, a dialect of Minyag Rabgang Khams

Hiroyuki SUZUKI

Sonam Wangmo

Universitetet i Oslo

Universitetet i Oslo

### Abstract

This article presents a sketch grammar of Lhagang Tibetan, a dialect of Minyag Rabgang Khams spoken in Tagong Village, Tagong Town, Kangding Municipality, Ganzi Prefecture, Sichuan Province, China. This sketch grammar deals with a variety of Minyag Rabgang Khams, so-called Lhagang-B, transmitted by the earliest sedentary Tibetans. It contains sound system and description (Section 2), noun phrase (Section 3), verb predicate (Section 4), and sentence construction (Section 5).

Section 3 *noun phrase* is divided into ten subsections: basic structure of the noun phrase (3.1), nouns (3.2), pronouns (3.3), interrogative words (3.4), nominalisers (3.5), grammaticalisation of position nouns (3.6), numbers (3.7), case marking system (3.8), adjectives as a modifier (3.9), and topic marker (3.10). Section 4 *verb predicate* is divided into eight subsections: basic structure of the verb predicate (4.1), copulative and existential verbs (4.2), general verb stems (4.3), adjectives as a predicate (4.4), prefixes (4.5), suffixes (4.6), verb concatenation (4.7), and verbal phrase concordance (4.8). Section 5 *sentence construction* is explained in variation of sentences (5.1), types of sentence (5.2), sentence embedding (5.3), and complex sentences (5.4).

Even though this article merely provides an essence of grammatical aspects of Lhagang Tibetan, it will be worth recording a traditional vernacular of Khams in Lhagang before it changes because of intense language contact.

*Keywords: Khams Tibetan; Minyag Rabgang dialectal group; noun phrase; verb predicate*